
月読の奏

南爪縮也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の奏

【Zコード】

Z8317W

【作者名】

南爪縮也

【あらすじ】

驚異的な科学技術を要し、高度な発展を遂げる王国アダムズ。そんな王国に突如として出現した【ヤツ】と呼ばれる人外の化け物の脅威人々は恐怖し、慄いていた。

王国は軍を派兵し、ヤツの討伐に動く。

だが尋常でないヤツの強さに、軍の若き隊士たちは舌を巻いた。

それでも決死の覚悟で戦い続ける隊士たち。多くの犠牲を出しながらも、激闘を戦い抜く隊士たちはあと少しというところまでヤツを追い詰めていた……

第一話 更待月の夜戦場

「……全員無事だな」

小隊長のファラデーは廃墟の壁を背にしながら、月夜に浮かぶ若い隊士一人一人の顔を確認した。

それらの顔には極度の緊張と疲労がうかがえたが、衰えのない戦いへの意志も感じられた。

ファラデーは崩れかけた窓から、廃墟の中をゆっくりと覗き込む。薄暗いながらも月明かりが少し差し込んだ廃墟の中は、十分に見渡すことができた。

そしてその中に【ヤツ】の存在を確認した。

かす 微かに震えた声で、静かに発せられるファラデー小隊長の指示が、インカムを通して隊士たちに届く。

「ジユール、お前はテスラを連れて左側の入り口に向かえ。ヘルツとガウスは裏口だ。俺は正面から行く。配置についたら合図するまで待機しろ。勝負は一瞬だ、気を抜くなよ」

隊士たちの体力はどうに限界を超えていた。若さゆえの気力と集中力でここまで来たのだ。

引き返すことの出来ない状況の中で、若い隊士たちの気持ちを繋つなぎ止めるために、ファラデー小隊長は力強く言った。

「ヤツに今までどれだけの仲間が殺されてきたことか。確かにあの強さは異常だ。だがそんなヤツとこれだけ戦いながらも、全員無事なのは決して運が良かつただけじゃない。」

自らにも言い聞かせるように、小隊長は続けた。

「自分達の力を信じるんだ。今確実にヤツを追い詰めている。俺たちならやれる。ヤツを倒すんだ！ この機会を逃したらまた大勢の人々がヤツの手にかかるだろう。そんなことは絶対にさせてはいけない」

夕暮れ時の人ごみ溢れる市街地で突然始まったこの戦いは、月の

明かりが輝きを増した頃、人気の無い廃工場に戦場を移し、あと少しというところまでヤツを追い詰めていた。

ただ当初四小隊いた部隊は、今やこの一小隊を残すのみになっていた。

左側の入り口についたジユールは、共に行動しているテスラの顔色の変化に気づき、声をかけた。

「どうしたテスラ。どこか痛むのか。」

「……ジユール。違うんだ、ごめん。僕は怖くてたまらない。」

「心配ない。さつき小隊長が言った通り【ヤツ】を追い詰めているのは俺たちのほうだ。ここまでやれたんだ。お前ならやれる。」

「僕はただ必死にみんなについて来ただけだよ。付いていくことに必死で、周りで大勢の人が傷ついていても気にならなかつた。ううん、戦いに集中することで気づかないようにしていたんだ。でもここに来て急に怖くなってしまった……」

ジユールは怯えるテスラに優しく話した。

「怖いのはみんな一緒だ。でももう少しだ。この壁の向こうにヤツがいる。でもヤツは深手を負っているし、かなり消耗しているはずだ。俊敏なヤツの動きに切れがなくなつてきているのは明らかだし、ファラデー小隊長の下でみんなが協力し、お互いをカバーし合えば絶対に倒せるはずだ」

同期入隊であり、訓練所時代からの親友であるテスラを、ジユールは温かく励まし続けた。

「自信を持つんだ！ この小隊で一番強いのはお前なんだ。それはみんなも良く分かつるし、頼りにしている。だがもしもの時は俺がお前を守つてやる。大丈夫、心配するなテスラ。絶対に死なせやしない。」

「ありがとう、ジユール……」

空元氣だが、テスラは強がるように微笑んだ。

ジユールは装備したインカムから全員が無事配置に着いたことを確認し、ファラデーの合図を待つた。

（今まで使い物にならなかつたインカムが、ここに来てようやく電波が改善されて正常に機能するようになつた。俺たちに運も向いてきた。やつてやるさ！）

ジユールは刀を強く握り、必死に自分自身に言い聞かせた。

今まさに命懸けの戦闘が始まろうとしている中で、弱気になつているテスラを励ますために強気なことを言つたジユールだが、彼自身もまた、その喉はカラカラに乾き、刀を握るその手の震えは収まることを許さなかつた。

気持ちを落ち着かせるため、ジユールは水筒を取り出し水を一口飲んだ。

久々に取つた水分が体中に染み渡るのを感じながら、深呼吸をした。

ジユールは、今にも折れそうな心に無理やり蓋を閉め強がる自分とは対照的に、正直に自分の弱さをさらけ出すテスラを少しだけ羨ましく思つた。

水筒をテスラに手渡しながら、ゆっくりと入り口の中を覗き込み、深手を負い蹲るヤツの存在を確認した。

額から止め処なく流れる汗を拭いながら、ファラデー小隊長の指示を待つ。

インカムからはヤツの様子を伺い、突入のタイミングを図るファラデーの小さい呼吸だけが聞こえていた。

周囲に緊張が走る。

ジユールは再度ヤツを確認するため、廃墟の中を覗き込もうとした。

「カラーン……」

後方より無機質な音が鳴つた。

ジユールは振り向き、音の鳴つた場所を見た。

そこには水筒を地面に落とし、血の気の引いた顔をしているテス

ラの姿があつた。

ジユールはすぐ様振り返り、廃墟の中を見た。
にヤツの姿は無かつた。

だがそこ

「全員後方に下がれ！」

ファラデー小隊長は小銃を抜きながら叫んだ。

そんなファラデーを突然影が包んだ。

ゾツとした彼が振り向いたそこには、人の形はしているものの、
3m程の巨体全てを黒毛で覆い【腐くさった豚】のような顔を持つヤツ
が、月明かりを背にして立っていた。

ファラデーはヤツに向け、小銃の引き金を引いた。

「ドサツ」

小銃の発射音とは明らかに異なる、重く鈍い音が足元から聞こえた。

た。

小銃を構えたままのその右腕は、根元から千切れちぎれ地に落ちていた。

「おおおおお」

ファラデーは苦痛に顔を歪ゆがめながらも、残された左腕で刀を抜き
ヤツに切りかかった。

ヤツはその一撃をかわすと、そのままファラデーの背後に素早く
回り込んだ。

「やめろーっ」

ジユールがそう叫ぶのと同時にヤツは、鋭い爪を持つその右腕を
ファラデーの背中めがけて突き立てた。

一瞬時間が止まつたかのように凍じおりついた。

月の光に照らされたファラデー小隊長の体は、人の3倍はあるつ
太いヤツの腕に貫つらぎかれ、奇妙に折れ曲がっていた。

「うあああああああ

尻餅じりもちをつきながら叫ぶテスラの悲鳴が、廃墟と化している工場に
響ひびき渡る。

混乱したジユールは何が起きたのか現状を把握することができず、ただファラデーと、その体を背中から無造作に貫くヤツの姿を見ていることしかできなかつた。

「……しょ、小隊つ。何をしている。今は作戦中だつ！　目標を叩けつ！」

ファラデーは薄れ行く意識の中で、血を吐きながら懸命に叫んだ。

「ジユールつ、お前はつくよ『ギヤヤオオオオオオつ！』

ファラデーの言葉を遮り、爆発音のような巨大な叫び声を上げたヤツは、躊躇なくその首をはねた。

凍りついていた時間が高速で動き出す。

「ヘルツ！　ガウス！　戦闘隊形【ホーネット】正面からヤツを叩き潰す！」

ヤツがファラデーの首を落としたことが、逆にジユールを冷静にさせた。

ジユールは無残にも切り落とされたファラデーの首を見る中で、ヤツに対する憎しみが増大し、その感情が必ずヤツを倒すという戦闘における集中力を高めることになった。

咄嗟に放つたジユールの指示に対し、即座に反応するヘルツとガウス。

二人はジユールより歳下であり軍における階級も下であったが、幾度の作戦を共にしてきたジユールの指示に対し、自然と体が反応した。

ジユールは拳大の黄色い玉をヤツに向け投げつける。

さらに小銃を両手に素早く構えると、ヤツに向け鉛玉を浴びせた。放された銃弾の一発が、先に投げられた黄色い玉に当たつた。玉は空中で弾け、激しい閃光が周囲を包んだ。

ヤツはたまらず目を押さえながら引き下がる。左足に深手を負っている状態にもかかわらず、小隊長の体を盾にしながら、ヤツは右足一本で10m後ろにある崩れかけた塀の影まで飛んだ。

そんなヤツに、抜刀したヘルツが猛然と走り込む。

ホーネットは敵に対し、複数人が一直線に連続攻撃を加える戦術だ。

小隊一俊足のヘルツは、裏口から一気に廃墟を走り抜け、さらに後方に飛んでいるヤツが地面に着地する前に切りかかった。

だがその瞬間、ヘルツは大きくはじけ飛んだ。

ヤツは右腕に刺さっていたままの小隊長の体を力任せにヘルツに向け投げ捨てたのだ。

小隊長の体と共に吹き飛ぶヘルツ。それでも吹き飛びながら小銃を1発放った。

銃弾はヤツの右足に当たり、体勢を崩した。

そこに一番手として小隊一怪力のガウスが駆け込み、ヤツの頭部を渾身の力で切りつけた。

ヤツは素早く反転し、その攻撃を背中で受けた。

「痛つ！ なんて硬い体してやがるっ！」

ガウスの太刀は確実にヤツを捕らえたが、背中を覆う鉄のような硬い肉に押し返えされた。

振り向き様に繰り出すヤツの反撃の拳を紙一重でかわし、痺れを感じる自らの腕に構うことなく、ガウスは全体重を刀に乗せもう一太刀を上段から振り下ろした。

「獲った！」

勝利の笑みを浮かべたのもつかの間、ガウスの顔は一瞬で青冷める。

無情にも鎖骨の辺りで切りつけた刀は折れていた。

「グオオオオオオオオ！」

ヤツは衝撃波のような叫び声をあげ、ガウスに向け右拳を振り下ろした。

「ダーン！」

遠く後方から銃声が聞こえ、それと同時にヤツは激しく体勢を崩した。

そこに三番手のジユールが刀を抜き飛びかかる。

ジユールの繰り出した突きは、ヤツの防御より早く、その左目を貫いた。

叫び声を上げ大きくのけ反りながらも、ヤツは左腕で強引にジユールをなぎ払おうとした。
額をかすめながらもヤツの腕をかわしたジユールは、橙色の玉を取り出し、まだ鎖骨のあたりに刺さったままの折れたガウスの刀めがけて投げた。

玉は刀に当たって炸裂し、ヤツの全身に電撃を走らせた。
ジユールは動きの鈍つたヤツの足に刀を突き刺した。
刀は足の甲を貫き、地面深くまで達した。

「くたばれ！」

ヤツの喉元に小銃を向ける。だがヤツは刀の突き刺さった足に構うことなく、その足でジユールに蹴りを入れた。

「ぐはっ」

吹き飛ぶジユール。だがヤツの足元には拳大の赤色の玉が落ちていた。

ガウスは廃墟の壁に身を隠しながら、その落ちている赤色の玉めがけて小銃を発した。

「ズガアアーンン！」

爆発が起こり、辺りは噴煙で立ち込めた。

「これでダメなりや笑うしかないぜ」

ヤツがいたであろう場所を見ながらガウスは呟く。

「ガウス、上だ！」

ジユールの声に反応し、ガウスは咄嗟に身をひるがえした。

鋭い爪を立てた腕を振り下ろし、ヤツが頭上より舞い降りる。
間一髪攻撃を避けたガウスは、そのまま渾身の回し蹴りをヤツの脇腹に浴びせた。

蹴りの入ったその脇腹は、先ほどの爆発で大きく損傷していた。
鈍いうめき声を上げながら、ヤツは動きを止めた。

「うおおおおっ！」

勝負所と感じたガウスは、その損傷そんじょうしている脇腹めがけ、持てる力全てをつぎ込み鉄甲てつこうをはめた拳を連續で繰り出した。

6発目の打撃を受けたヤツの体は完全に【くの字】になつた。そこを見逃すガウスではない。とどめの一撃をヤツのアゴ目掛けで放つ。

アゴを捕らえたガウスの拳は、そのまま上空に突き抜けた。

が、同時にガウスの体も上空に吹き飛んだ。

ヤツは自らのアゴが跳ね上げられると同時に、膝蹴りひざげをガウスのアゴに浴びせていた。

お互いのアゴの碎ける鈍い音くだがすると共に、ガウスは空中で氣を失い、そのまま地面に倒れ込んだ。

完全に足にきているヤツだったが、ふらつきながらも倒れているガウスに近づき左腕を振り上げた。

「ダーン！」

銃弾がヤツの左肩に命中し、そのまま崩れるように倒れた。

倒れながら銃弾の飛んできた方向を、ヤツは残された右目で睨んだ。視線の先には小隊一の狙撃の名手マイヤーの姿が小さく確認できた。

100mは離れているであろう、崩れかけた木造の塔の3階にある小さな窓からライフルの銃口がヤツを狙っている。

ファラデー小隊長はヤツを追い詰める途中、スナイパーであるマイヤーの特徴を生かすため、あらかじめ戦場の全域が見渡せるこの位置に彼を向かわせていた。

ただマイヤーは先の戦いの中で、ヤツから受けた攻撃により左目を失っていた。

引き金を引く度に気を失いそうになる激痛を顔面に感じ、その左目を覆う包帯おおひたいは真っ赤に染まっていたが、それでも彼は冷静に狙いを定め、ためらうことなく引き金を引いた。

ライフルから放たれた強弾は、ふらつきながら立ち上がったヤツ

の左こめかみをかすめた。

「左目を失つた影響か。弾が少し右にズレる」

マイヤーはヤツから田を離すことなく、冷静に状況を分析しながらライフルに弾を込めた。

「俺に気づいているヤツを、近距離からのサポート無しで死止めるのは不可能だ。どうする……」

常に平静を保ち、ペースを乱したことのない彼であつたが、この時ばかりは引き金にかける指先に今まで感じたことのない緊張が走つた。

だが突然、ヤツの視線がマイヤーから外れた。

「今だ！」

指先に力を込めようとした同時に、信じたくない状況が視界に入り、背中に冷たい汗が一気に溢れる。

ヤツの向けた視線の先には、腰が抜け、ただ呆然と涙を流しているテスラの姿があつた。

「何やってんだ、あいつは」

マイヤーはヤツにライフルの照準を合わせながらも、窓から身を乗り出し懸命に叫んだ。

「テスラ立て！ 立つて刀を抜くんだ！」

テスラは若いながらも剣の達人だ。その腕は厚さ5ミリの鉄板を平然と切り捨てる程に。

軍のトップである総指令官を父に持ち、幼い頃から剣を叩き込まれた。教えられた技は砂が水を吸うことなく容易に全てを吸収した。まさに天才だ。その上努力家でもあつた。決して自分の腕に満足することなく、日々思考を重ね、更なる極みを目指していた。

そんな国一番の呼び声高い剣の使い手であるテスラだが、同時に国一番の優しい心の持ち主でもあつた。

訓練ではまさに神業的な刀さばきを披露していくても、普段は虫をも殺せぬ性格だった。

目の前で現実に起きている血まみれの戦いに、彼の心は粉々に崩れていた。

叫ぶマイヤーの声はテスラに届かない。

脇腹を押さえ、足を引きずりながらもヤツは着実にテスラに近づいている。

「テスラ！頼むから立つて刀を抜け！」テスラ…
マイヤーの目には、30センチはあろう廃墟の残骸を無造作につかみ、自分めがけて投げつけるヤツの姿が写った。
空気を切り裂く轟音を響かせ、投げられた残骸は一直線にマイヤーに向かった。

向かつてくる残骸にライフルの照準を即座に合わせ、弾丸を放つた。

弾丸は残骸に命中した。だが粉々になつた残骸の破片は、それでも彼に向かった。

「くそつ……」

窓から乗り出していた身を必死に塔の壁に隠す。直後に残骸の破片が壁に降りそそぎ、激しい音を立てた。

木造の塔の壁には、無数の風穴がハチの巣のように開いた。

「ヘルツ、動けるか

ジユールは脇腹を押さえ蹲るヘルツに言った。

「大丈夫だ。肋骨が何本かいつたみたいだが問題ない」

そう応えるヘルツの顔色を見る限り、決して無事でないことが分かる。

それでもジユールは指示を出した。

「ヤツの右に走り注意を引け。俺はヤツの死角から攻める。赤玉とガウスの攻撃でヤツの脇腹はボロボロだ。残りの赤玉はあと一つ。こいつを確実にくらわせるしかもう、ヤツを倒す手段が無い」

「了解。けどジユールさん、あんたこそ大丈夫か。辛そうだぞ」

「お前より一本多くアバラが折れるだけだ。これ以上ヤツがテス

ラに近づくと赤玉が使えない。行くぞ!」

同時に一人は走り出す。

ヘルツの走りにいつもの速さが無い。

折れた肋骨^{ろうこつ}が肉に食い込み、地面を駆る^ことに激痛を感じる。

流れ出る鼻血で息ができず、みるみる顔が青冷める。

ヤツはそんなスピードのないヘルツに気づき、彼めがけて廃墟^{はいきょ}の破片を立て続けに投げつけた。

いくつもの豪速^{じゅうそく}の破片がヘルツに向かう。

そんな追い詰められた極限の状態が、逆にヘルツの才能を開花させた。

集中力を高めた彼は、痛みを無視して一気にスピードを加速させ、襲^{おそ}い来る破片を稻妻^{いなずま}のごとくかわした。

そして両手に短刀を握りながら廃墟の壁を利用して、ヤツめがけて大きくジャンプする。

ヤツは人間離れしたスピードで向かってくるヘルツをなぎ払うよう右腕を振り抜いた。

だがそこにヘルツの姿は無かった。

ヤツがその腕を振るよりも早く地面に着地し、滑り込むようにヤツの股間^{こかん}を潜り抜ける。

そしてヤツの右足にある銃弾を受けた傷跡^{きずあと}をめがけ、短刀を突き刺した。

そのままヤツの右側に回りこみ、ヤツの鋭い視線が自分を追つているのを確認すると、わざとヤツの視線が自分から離れないよう、後方にジャンプした。

ヤツは足元にあつた1m程の大きな廃墟の残骸^{ざんがい}を両手で持ち上げ、ヘルツに投げるべく振りかぶった。

その瞬間ヤツの死角である左後方から、左手に小銃を握るジュー^{わきぱり}ルが赤玉をヤツの脇腹^{わきばら}めがけて投げた。

小銃を赤玉に向ける。

だが突然ジュー^ルに廃墟の残骸が襲^{おそ}い掛かった。

ヘルツに向け残骸を振りかぶったヤツは、その重さに耐えられず、振りかぶった残骸はそのまま後方にいたジユールに向け飛んだ。

「ふざけるなっ」

ジユールは飛んでくる残骸を避けようと横に飛んだが、残骸はジユールの体をかすめ、地面に激突した。

残骸はジユールを軽くかすめただけであつたが、その体を吹き飛ばすには十分だつた。

ジユールは数m離れた壁まで飛ばされ、激しく体を打ちつけた。

「くそつたれが……」

左手にあつたはずの小銃も、どこかへ飛ばされていた。

ジユールの姿が吹き飛ぶと同時に、後方に飛んだヘルツは瞬時に向きを変え、ヤツに向かって突進した。

一直線に駆けたヘルツは地面に落ちる前の赤玉をつかみ取り、そのまま止まらずヤツに向かつて駆けた。

自らに向け突き出されたヤツの腕をも駆け上がり、そのままの勢いでヤツの顔面にひざ蹴りを入れる。

さらに空中で身をひねり、ヤツの右足に突き刺さっていた短刀に飛び蹴りを入れた。

「ギヤヤー！」

短刀は右足を貫通し、ヤツは悲鳴を上げた。

着地したヘルツはまるでつむじ風のように回転し、ヤツの損傷している脇腹に自らの拳を手首が埋まるまでねじ込んだ。そして腕を引き抜くと同時に、一步後方へ大きくジャンプした。

ヘルツが拳をねじ込んだヤツのその脇腹には、赤玉がめり込んでいた。

ヘルツは手にしていた最後の短刀を、赤玉めがけて投げた。

が、そのまま静かに倒れた。

まさに疾風迅雷ともいえる華麗な連続攻撃は、大きなダメージをヤツに与えた。だがそれと引き換えにヘルツの足は完全に砕けてい

た。

バランスを崩しながら投げられた短刀は、無情にも赤玉を逸れヤツの腕に刺さつた。

「まだまだっ！」

そう気合を入れ直すヘルツだが、彼の足はその意に反し、動くことを拒否した。

ヤツは腕に刺さつた短刀を引き抜き、動けないヘルツに対し狙いを定め、ゆっくりと振りかぶつた。

「やられる……」

そう感じて目をつぶるヘルツに、突然何かが覆いかぶさつた。

「グサツ！」

短刀が肉に突き刺さる音が聞こえ、ヘルツは静かに目を開いた。そこには自らを覆い隠すジユールの姿があり、その肩には短刀が深く突き刺さっていた。

「ジユールさん！」

「伏せていろっ」

ジユールは起き上がりうとするヘルツを強引に押さえつけた。次の瞬間、

「ダーン！」

後方よりライフルの発射音がしたのと同時に、赤玉の爆発する轟音が鳴り響いき、周囲はその爆風で吹き飛んだ。

風穴の開いた木造の塔から、血まみれのマイヤーがライフルを構えていた。

大きなダメージを受けつつも、どうにか致命傷を免れたマイヤーは、今にも途切れそうな意識の中で、ぎりぎりまでチャンスを待ち、一瞬の隙を突くように赤玉に向け引き金を引いた。

そして赤玉が爆発したのを確認すると、彼は静かに氣を失つた。

「……ールさん。しつかりしろ、ジユールさん！」

気を失っていたジユールは、ヘルツの呼びかけで目を覚ましたが、

爆風の衝撃で視界が揺れた。

どうにか五体そろつてはいるが、爆発による衝撃と火傷によつて全身から発せられる激痛は、意識を保つことに抵抗しながらも、意識を失うことを拒絶した。

「やつ、ヤツは……、ヤツはどうなつた……」

力無くヘルツに問うジユールの視線の先には、粉塵の舞う中にぼやけて見える仁王立ちのヤツの影があつた。

「やつた……、やつたのか……」

問い合わせとも一人ごとともとれぬ言葉を発しながら、ジユールは激痛を堪えて上半身を起こし、影を見据えた。

その影にはまったく動く気配がなかつた。

どれくらい時間が経つたのだろうか。

周囲を覆つっていた爆発の粉塵が消え、ついにヤツの顔を確認することができた。

その顔をみたジユールとヘルツは愕然とした。

ヤツは生きていた。残されたその右目はまだ光を失つていなかつた。

「うおおおおおお

ジユールは肩に突き刺さつている短刀を引き抜きながら、強引に立ち上がろうとした。

傷口から噴き出した真つ赤な鮮血は、緑色の制服をみるみる赤黒あかくろくろへ染め上げていった。

全身の骨がきしみ、息をするだけで死にそうなダメージを受けているその体で立ち上がつたジユール。

その時、彼の体の中で何かが起きていた。

彼の右目は青白い光を放ち、聞こえる鼓動は大地を揺るがすかのようであつた。

そんなジユールをただ呆然と見上げるヘルツは、まだ生きてはいるものの、動くことのできないヤツよりも、異様な威圧感を放ちながら無理やり立ち上がつた、血と埃まみれのジユールのほうを恐ろ

しぐ感じた。

何より青白く光るジユールの右目は、見た者の魂を地獄の底に突き落とす【修羅】の物に思えた。

「ジユールさん、あんた……」

ヘルツの声を無視して、ついにジユールは走りだした。

邪魔な痛みを置き去りにして、ただヤツに向かい真っ直ぐに走る。そのままヤツに体当たりをすると、力なくその巨体は倒れた。

ジユールはそのまま馬乗りになると、両手で短刀を握り締め、頭上に振り上げた。

「うおああああ！」

短刀を振り下ろそうとした瞬間、ジユールとヤツの視線が交錯した。

ヤツのその眼差しからは、人に対する異常なまでの恨みや憎しみが感じられたが、それ以上にジユールには何とも言えない哀しみを感じられた。

そしてその哀しみが、なぜかジユールの心に深く突き刺さり、短刀を振り下ろすことが出来なかつた。

「どうしたジユールさん！ 早くヤツに止めをさすんだ！」

ヘルツの声が聞こえたが、ジユールは動けなかつた。

「お前は、お前はなぜこんなことをする……」

ジユールはヤツに問い合わせた。自分でもなぜそうしたのか分からぬ。ただ聞かずにはいられなかつた。

そんなジユールの問いかけに、ヤツが静かに口を開いた。
「驚イタナ、キサマ。ツクヨミノ胤裔力……」

「…………」

唐突の出来事に、ジユールは戸惑う。

「今ハマダ【ツクヨミノカナデ】ヲ、感ジテイナイカ、……」

「つく、よ、何？」

驚きと、意味の分からぬ言葉にジユールは混乱した。

ヤツは馬乗りになつているジユールの体を軽く押し退けた。

ゆつくりと立ち上がるヤツを、ジユールはただ呆然と見つめていた。

そんなジユールにヤツは言った。

「イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」

「なつ、何を言つてんだお前は」

流れる雲が月を隠し、辺りは影に包まる。

ジユールの言葉にヤツは何も答えなかつたが、ただジユールの目を少し見つめた。

その目から訴えかける何かをジユールは感じたが、この時はまだその意味が分からなかつた。

ヤツはゆつくりと向きを変え、ボロボロになつた体を引きずりながら影の中に消え去るうとした。

ジユールはただ、静かに去り行くヤツを見ていることしか出来なかつた。

「トスつ

薄暗い影の静寂の中で奇妙な音が鳴り、ヤツの足が止まつた。

月を隠していた雲が、ゆつくりと晴れていく。

月明かりによつて次第に浮かび上がるヤツの背中に、不気味に光る刀の切つ先が突き出でいた。

次の瞬間、その刀は音も無くヤツの体から引き抜かれ、横一線の閃光せんこうが走つた。

ヤツの体は後方に倒れ、その反動でジユールの足元に何かが転がつてきた。

「！」

そこには切り落とされたヤツの首が転がつていた。

開かれたその目はまだ、自らに起きた事実に気づいていないかのよう見開いていたが、その目の光は完全に失われていた。

ジユールはヤツの体のほうに視線を戻した。

そこには刀を抜いて立つてゐるテスラの姿があつた。

ヤツの血を振り払つた刀を、静かに鞘さやにしまうテスラにはどこか落ち着きがあり、恐怖で怯おびえるあの面影はどこにも見当たらなかつた。

「テスラ、お前……」

ジユールはテスラの放つ、冷たい異様な何かを感じた。だがそれと同時に別の違和感を感じた。

ふと首の無いヤツの体を見ると、全身の毛が抜けて行き、その大きな体がみるみる縮んでいくのが分かつた。

「何だ、どうなつているんだ……」

気がつくと、ヤツの体は人の体になつていた。

そして切り落とされたヤツの首もまた、人のそれに変わつっていた。体全身に寒氣さむけを覚えながらジユールは力尽ちからづき、その場で気を失つた。

夜空から降り注ぐ月の明かりは、ヤツの体から流れ出てできた血溜まりに反射し、終わりを告げた戦場を赤く染め上げていた。

第一話 汗返りのホーム

「ツクヨミノ胤裔ヨ。イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」
ヤツは静かに言い放ち、影の中に消えて行く。

「待て！ 待つてくれ」

ジユールは叫びながらその後を追つた。

しかしヤツは離れて行くばかりで追いつけない。

「キン……」

甲高い鉄の音が鳴ると共に、横一線の閃光が走った。

ジユールは追い駆ける足を止めた。

そんな彼の足元に、ヤツの首が転がる。

切り落とされたその首は、みるみると人の首に変化していく。

ジユールは、どこか見覚えのある姿へと変化していくその首から目を離せずにいた。

恐怖で震えるジユール。

見覚えがあるはずだ。

そう、完全な人のものへと変化したその首は、ジユールの首であった。

「うああああ

飛び起きるジユール。息は荒く、全身に汗を搔いていた。

「くそ、またこの夢か……」

あの月夜の戦いからすでに半年が経過していたが、ジユールは同じ夢を数え切れないので繰り返し見ていた。

すでに日は昇り、活氣づく街の音が窓の外から聞こえる。

「めずらしく寝入ってしまったな。それにしても何故あの夢ばかり何度も見るんだ……」

顔を洗いながら、繰り返し見る夢を思い返した。

右目の奥に少し痛みを感じた。

あの夢を見た後は決まつてこうだ。め覚めの悪さから来るものなのだろうか。

軽めの朝食を取りながら、久しぶりの休日につしか時を忘れ、あの日のことを考え込んでいた。

(ヤツとは一体何なんだ。ヤツの言つた言葉の意味は何だ。俺にどんな関係があるんだ)

考えれば考えるほど意味が分からず、ただいたずらに時間だけが過ぎていった。

ジユールはあの日の事を、誰にも言えずにいた。

戦場で氣を失い、氣が付いたときには病院のベットの上だつた。体全身を包帯で包んだ彼は、先程と同じ夢を見て目が覚めた。

現実と夢が交錯し、何が本当で何が偽りか分からず頭の中が混乱したが、皮肉にも実の兄の様に慕つていたファラデー小隊長の葬儀そつぎに参列することで、現実を把握することが出来た。

それでもジユールに対するヤツの言葉の意味や、ヤツを冷酷に始末したテスラの姿が脳裏に焼きついたまま離れなかつた。

さらにあの戦いについて、不思議なことに軍から何の報告も要求されなかつた。

確かに目標としていたヤツを倒し、その目的を達成したわけだが、その過程で多くの市民が犠牲となり、また作戦に従事していた三小隊が全滅し、残った隊も隊長を失い、生き残った隊士もほとんどが瀕死の重傷を負つたという、軍にとって甚大な被害を与えたこの戦闘に対し、何も聞かれることが余計に彼の心に疑問を抱かせた。

ただ分かつてていることは、自分同様に負傷を負つたヘルツ、ガウス、マイヤーの3人についても、何も聞かれていないということ。

そしてあの戦闘の後、初めに駆け付けた後続部隊が一般の部隊でなく、国王直属の近衛部隊けいえいぶたい、通称【コルベット】であり、テスラはそのコルベットと共に事後処理に携わつたということだ。

(テスラは何か知つてゐるはずだ)

ジユールはそう確信めたものを感じていながらも、直接テスラ

に問うことができなかつた。

なぜなら、入院中のジユールを見舞いに来たテスラはいつもの優しい彼であり、自分の不外無^{ふがいな}さを責^せめ続けた。

「ごめん、ジユール」

そう言つて謝^{あやま}るテスラの穢^{けが}れを感じさせない瞳を見ると、ジユールは何も言えなくなつた。

だがテスラが優しい言葉を掛けるほどに、ジユールは戸惑^{とまど}い、複雑な気持ちになつた。

「トントン」

扉をノックする音が聞こえた。

「今日俺が休日なのは、誰にも言つてないはずだが……」

「どことなく警戒心^{のんき}が強くなつてゐるジユールの気持ちとは裏腹に、呑氣^{のんき}な声が聞こえた。

「ジユールさん、ご在宅ですか？」

やつぱ居ないか

久しぶりに聞いたその声が、ジユールに少しだけ元気を与えた。

「ヘルツか、久しぶりだな」

扉を開けるとそこには、半年振りに会うヘルツの姿があつた。

「おっ、ラッキー。ジユールさん居てくれたよ」

「足のほうはもう大丈夫みたいだな。散らかつてるが、まあ入れよ

「いや、ここでいいす。あんま時間無いんで。挨拶^{あいさつ}に来ただけですから」

「どうかしたのか？」

数ヶ月に及ぶ過酷^{かじく}なりハビリを乗り越えたヘルツの足は、完全に回復していた。

そんな彼は職務に復帰することになり、新たな配属先が決まったことをジユールに伝えに來たのだ。

「とりあえず南部の街【ラングレン】にある軍支部にこれから列車で向かいます。出発時間に余裕^{あいりゆう}が無いんで

「そうか、ずいぶん急だな。せつかだから駅まで送るよ。今日は非番だしな」

手早く身支度を済ませたジユールは、ヘルツと共に駅へ向かった。

昨日まで温かい日が続いていたが、今日に限って今にも雪が降つて来そうな、どんよりと曇った空をしていた。

真冬の寒さが身に凍しみたが、それでも久しぶりに話すヘルツとの会話にジユールは居心地の良さを感じた。

「南部のラングレンなら、だいぶ暖かいだろうな」

「そうでしょうね。この寒さは古傷に堪こたえるし、ちょうど良かつたのかも」

「それにしても、あれ程の重傷がよく半年で回復したな」

「へつ、地獄のよつなりハビリでしたよ。一度と御免ごめんですね。でもそれを言つならジユールさん、あんたこそタフですね。俺から見ればあなたの体も相当酷ひどく感じたけど、十日もしないで退院しちまうんだからなあ」

「…………」

ヘルツの言葉を聞いて、ジユールは歩みを鈍じぶらせた。

ジユールの体は自分でも信じられない程の早さで回復した。

折れた肋骨に全身の火傷やけど。さらに肩に深く突き刺さつた短刀の傷

も、目を疑うほどの早さで治つていった。

その異常とも言える回復力の高さもまた、彼を不安にさせる原因の一つになっていた。

「すみません、無神経な事を言つてしまつて。気にしてたんですね

…………

「いや、いいんだ。悪いのは俺のほうだ。最近の俺は頭も無いのに考え過ぎだな」

旅立つヘルツに要らぬ氣遣きがいいをさせてしまつたことに、ジユールは申し訳なく感じた。

「お~い！」

突然一人を呼ぶ声がした。

振り向くと、青い制服姿のガウスが息を切らせながら走り寄つて

来た。

「おうガウス、久しぶりだな」

「ハアハア、ジユールさん、お久しぶりです。ハアハア……、ヘルツも一緒にちょうど良かつた」

息を整えつつ、ガウスは言った。

「ヘルツ、お前薄情^{はくじょう}だな。今日が出発の日だって、なんで教えないんだ」

「別にこれが一生の別れじゃないんだ。たいした事じゃないだろ」「バカ野郎！ 入隊以来ずっと一緒にやつてきた仲じゃないか。城で会ったテスラさんに言われて知ったんだぞ。とりあえず駅に向かえば追いつくかと思って急いで来たんだ」

「スマン、悪かつたよガウス。城の警備隊に配属されたばかりで何かと忙しいと思ってな。なにより別際にお前の阿呆^{あほつら}面見ると、気分良くこの街から旅立てない気がしたんだ」

「なんだと！」

「まあ一人とも、その辺でいいだる。これからは別々の道を進むことになるが、お前たちは共に死線をくぐり抜けてきた仲間なんだ。別れのときくらいお互い素直になれよ」

三人は共に経験した軍での思い出話をしながら、駅につくまでの短い時間を楽しんだ。

慌^{あわただ}しく人々が行きかう中、中央に大きな女神像が立つ駅前ロータリーに着いたところでガウスが言った。

「俺はここでお別れだ。勤務中に無断で抜けて来てるし、ジユールさんも居ることだしな。ここからタクシーで城に戻るよ。元気でな、ヘルツ」

「ああ、忙しいのに見送りに来てくれてすまなかつたな。お前こそ体に気を付けるよ、妻子^{さいし}がいるお前の身に何かあれば、お前一人の問題じや済まないんだからな」

「実は女房の腹ん中にもう一人いるんだ。家族^{かぞく}つてもんは良いもんだけ。お前も南国でいい嫁見つけるよ！」

「心配しなくとも、とびっきりの美人と一緒にになってやるぜ。後で腰抜かすなよ」

「そう言えばジュークさん。春にはあんたも所持だな。うちのと違つて綺麗な奥さんで羨ましいぜ」

「おだやかてるなよガウス」

ジュークは少し顔を赤らめながら一人に言った。

「お前の時ほどじゃないが、ささやかだけど式は上げるつもりだ。その時は当然一人も呼ぶつもりだから来てくれよ」

「楽しみだな。じゃあ次に再会するのは春か。案外早いな」

「そう思うと、なんだかお別れムードもしらけてくるな。じゃあな、ヘルツ。」

簡単な別れの言葉を口にし、ガウスはその場を去つていった。

アダムズ王国。

驚異的な科学立国として知られるこの国は、隣接する国々よりも遙かに豊かであり、また活気に満ち溢れていた。

【首都ルヴェリエ】の中心には、現国王であるアルベルト王の住む強大なアダムズ城がそびえ立ち、その城下町にあるアダムズ中央駅は国最大の駅であり、全ての列車の始発駅として溢れんばかりの人がみで賑わっていた。

「ファラデー小隊もバラバラになっちゃいましたね。俺、結構気に入つてたんだけどなあ」

ホームに着いたヘルツは、少しの間見納めになるアダムズ城を遠目に眺めながら、思い出に浸るように言った。

小隊長であるファラデーが殉職したことと、その後の隊士たちの回復に時間差があったこともあり、小隊は完全に解散していた。

家族を持つガウスは、もとより希望していた比較的勤務条件が容易なアダムズ城の警備隊に配属された。

マイヤーは彼自身が小隊長となり、部隊を指揮する立場として東部の街へ向かつた。

テスラは国王直属近衛部隊コルベットに配属。そしてジユールは軍総指令直轄戦闘部隊【トランザム】に配属されていた。

「それでもジユールさんとテスラさんは凄いな！ その若さでそれぞれ軍の最高部隊に配属されたんだから。何だか俺も鼻高いつすよ。ファラデー隊長もきっと喜んでるはずです」

その言葉にジユールは軽く微笑んだ。しかし心中では反対に、この配属にも疑問を感じていた。

コルベットとトランザム。王国の双璧そうへきを成す最強の一^二部隊ではあるが、その実態は犬猿の仲であり、いつ衝突してもおかしくないほどの険悪な状況に置かれていた。

これはアルベルト国王とテスラの実父である総司令アイザックの関係悪化によるものとされ、さらに皇太子であるトーマス王子がアイザック総司令と親密な関係であることが、状況をさらに複雑にさせていた。

何よりジユールは、テスラ自身が父の指揮するトランザムではなく、相対するコルベットに所属したことが気になつて仕方なかつた。（テスラとアイザック総司令の関係は良好なはず。だがあの戦い以来、何かは分からぬがテスラは変だ……）

ホームにはすでに、白い蒸気をもうもうと上げ、出発の準備が整つている列車があつた。

「ジユールさん」

考え込むジユールの顔を心配そうに見つめながら、ヘルツは言った。

「ジユールさんは早々に退院しちまつたし、その後すぐにトランザムに配属されて全然機会がなくて……」

雜音でざわめき立つホームで、別れ際に突然切り出したヘルツの言葉に、ジユールは耳を傾けた。

「このままずつと自分の胸にしまつておこうと思つた。とても現実とは思えなかつた。何度も夢であつてほしいと願つた。でもあの出来事は眞実で……」

ヘルツはぐつと唇を噛み締めた。

彼もまたジユールと同じく、あの日から胸にしまい続け、今まで誰にも言えずにいた事があった。

「ジユールさん、やっぱりあんただけには話しておきたいことがあります」

そして一呼吸おき、覚悟を決めたようにヘルツは話出した。

「ヤツとの戦いが終わった後、俺もジユールさんと同じように力尽き、気を失つてしまつた。でもあんたが意識を無くした後で、コルベットが到着するまでの短い時間に起きた事を、俺ははつきりと覚えていてる」

ざわめく駅の騒音にかき消されることはなく、ジユールの耳にはヘルツの話す言葉だけが鮮明に聞こえた。

あの戦場でテスラがヤツの首を跳ね、その姿が人のものに変化するのを確認したのとほぼ同時に、ジユールは気を失つた。

それを見ていたヘルツは声すら出すことも出来ず、終わりを告げた戦場をただ呆然^{ぼうぜん}と見ていた。

そんな彼の体も、激闘の影響で全身に激痛が走り、意識が途切れそうになつた。

だがその時、月明かりに照らされたジユールの体は、一瞬銀色の輝きを放つた。

「何だ……」

ヘルツは激痛に耐えながらも、目を凝らしてジユールの体を見た。赤玉の爆風からヘルツを庇つた時の衝撃で、ジユールの背中は焼けただれ、ボロボロのはずであった。

そして短刀を引き抜いた肩の傷からは、とめどなく赤い血が流れ出していたはずだった。

しかしヘルツが見たジユールの背中には傷跡^{きずあと}一つ無く、また肩から流れ出る血は完全に止まっていた。

「目の錯覚か……いや、そんなはずはない……」

悲鳴を上げる体に、ヘルツは一瞬氣を失いそうになる。

必死に痛みを堪えながら目を開けると、いつの間にかジユールの横にテスラが立っていた。

ジユールを見つめるテスラの眼差しから、どことなく違和感を感じたヘルツ。

それでもこの後、テスラは瀕死のジユールを介抱するものと、ヘルツは疑わなかつた。

「えつ……」

テスラは静かに刀を鞘から抜いた。

そしてその刀を逆手に持ち直すと、自らの顔の高さに構えた。

刀の向け先は間違いなくジユールであり、その刀は月明かりを浴びて怪しく輝いていた。

「なつ、何をしているんだ、テスラさん！」

必死に止めようと叫ぶヘルツ。

その声を無視するかのように、テスラは静かに言った。

「ごめんね、ジユール」

「やめるんだ、テスラさん！ やめろっ！！」

ヘルツの叫ぶ制止の言葉は意味を成さず、テスラは刀をジユールに向け振り下ろす。

だがその瞬間、

「ズガガガーン」

突如として発生した猛烈な突き上げられる衝撃によつて、大地は大きく揺れた。

体勢を崩したテスラの刀は軌道を逸れ、ジユールの体を外し地面に突き刺さつた。

揺れが收まり、ジユールの無事を確認すると、ヘルツはほつと胸を撫で下ろした。

しかし次の瞬間、ヘルツは今まで感じたことのない、すさまじい殺氣を全身で感じた。

恐る恐る振り返り、殺氣の感じる場所に視線を向けた。

廃工場の屋根の上に、月を背にした【ヤツ】の姿があった。

現れたヤツは全身を銀色に輝く毛で覆う、精悍な【狼の顔】をした姿であり、その背中には巨大な翼を持っていた。そして大地から刀を引き抜くテスラを睨みつけるその右目は、地獄の炎のように真っ赤に輝いていた。

そんなヤツからヘルツは目が離せなかつた。どこか氣品漂う、銀色に輝くその美しい姿に見とれていた。

気づくと不思議なことに、纏わり付くようなおぞましい殺氣は消え、代わりに深い愛情から生まれる安らぎのような温かい感覚を感じていた。

ヤツはジユールを見ていた。その眼差しはとても優しいものだつた。そしてどこか哀しいものでもあつた。

「ダダダダダダつ！」

後方から激しいマシンガンの銃声が鳴り響き、数え切れない銃弾がヤツに向け飛んだ。

ヤツは巨大な翼を広げ、悠然と夜空に飛び立ち銃弾をかわした。

「現れたぞ【ラヴォアジエ】だつ！ 逃がすな！」

黒い制服に身を包んだ九人の兵士が現れた。

そう、彼らは国王直属の近衛部隊コルベットの隊士たちだつた。アダムズ王国の誇る最新の装備を武装した彼らは、人間とは思えないスピードで走りラヴォアジエと呼ぶヤツを追つた。

強力なナパーーム弾やビーム砲が発射されたが、ヤツは容易にそれらをかわした。

ヤツは攻撃を仕掛けるコルベットをあざ笑うかのように、上空を優雅に旋回していたが、突然向きを変え急降下をはじめた。

ヤツの目指す先にはテスラがいた。

凄まじいスピードで向かつてくるヤツに対し、テスラは冷静に居合いの体勢で待ち構える。

「ガキンつ」

二人が交錯するのと同時に、鈍い鉄の音が鳴つた。

テスラの刀は粉々に碎かれ、その体は数メートル吹き飛ばされた。ヤツはそのままの勢いで上空に舞い上がるうとした。が、

巨大な翼の一枚が切り落とされていた。

飛立つことの出来ないヤツは大地を転がり、廃工場の壁をなぎ倒しながらようやくその体を止めた。

粉々に舞い散った刀の破片が月明かりに反射し、周囲を幻想的な風景に仕立て上げていた。

ヘルツは、目の前で起きている現実とは思えない出来事に言葉を失つた。

「チャンスだ！ 戦闘隊形【アントリオン】 チームは弾が尽きるまでラヴォアジエを打ち続ける！ チームは【プラズマ・トマホーク】の準備を即座に整える」

隊長らしき人物の指示が飛び、コルベットは一糸乱れることなく作戦を遂行する。

前後左右から、翼の切り裂かれたラヴォアジエと呼ぶヤツを取り囲み、ガトリング砲による一斉射撃が始まった。

轟音を響かせ、数万の弾丸がヤツに向け打ち続けられる。その攻撃に対し、ヤツは自身の周囲に目に見えない球体状のバリアを形成して身を守った。

「あれが【迦具士】のか。だがその力も永久なものではない。打ち続けるんだ！」

鳴り止まぬ発射音で襲い掛かる数多の強弾は、着実にヤツを追い詰めていく。

ヤツの張る迦具士と呼ばれるバリアは、徐々にではあるが確実に小さくなつていった。

しかし撃ち続けるガトリング砲にも変化が表れ始める。

銃身は次第に赤々と色づき、白煙を上げた。

そして四方向からの攻撃の内、弾が尽きたことと銃が破損したことで、二方向の攻撃が停止した。その時、「

「プラズマ・トマホーク、放てっ！」

ガトリング砲での攻撃の間、ヤツの四方に人の身丈ほどの金属の支柱が大地に突き立てられていた。

隊長の攻撃命令が下ると、ヤツを中心に支柱同士が電極となり、凄まじい高圧放電が発せられた。

「グギヤアアア」

迦具士は消え去り、もろに電撃を受け絶叫するラヴォアジエ。

それでもヤツは電撃に耐えながら、何処からともなく小さな白い玉をと取り出した。

「何をするつもりか分からんが、そのまま放電を続ける！」

コルベットの隊長は攻撃の続行を指示し、ヤツの仕草を注意深く監視しながらビーム砲を構えた。

ヤツは電撃を受け続けながらも、赤い目を鋭く光らせると、取り出したその白い玉を勢いよく地面に押しつけた。

「ビキーン」

鼓膜こまくを突き破るような高周波の衝撃が、ヤツを取り囮む者全員の脳に直接響き、同時にプラズマ・トマホークからの放電が止まった。突然の衝撃で一瞬気が遠のいたコルベットの隊士たちは、膝をつき攻撃の手を止めた。

その中でコルベットの隊長だけは、必死に衝撃に耐え、ヤツに向構えていたビーム砲の引き金を引いた。

だがどう言う分けかビーム砲は機能せず、発射されなかつた。

「ヤツめ、電子兵器の制御を狂わせたのか。ならば！」

隊長は背中に背負っていた長刀を抜き放ち、ヤツに向けて瞬足に駆け出した。

「対ラヴォアジエ用に開発された大刀【十拳封神剣】が一つ、モデル【天乃尾刃張】、その威力その体で思い知れ！」

猛然とヤツに詰め寄る隊長。構えた長刀は不気味に紫色の光を放つ。

「グオオオオ！」

向かつてくるコルベットの隊長をその赤い目で睨みながら、ヤツは低い唸り声を上げた。

もう一步というところまで隊長が近づいた瞬間、突如ヤツの体を業火が包んだ。

炎に構わず、隊長は長刀天乃尾刃張あまのおほばつをヤツめがけて振り抜いた。

真つ二つに切り裂かれる炎。

だがそこにヤツの姿は無かつた。

「どこだ！」

隊長が頭上を見上げると、炎の塊かたまりが天高く舞い上がっていた。夜空に浮かんだ炎の塊は、そのまま空中で形を変え、再び翼の蘇よみがえつたラヴォアジエの姿になつた。

「くそつ、【火之夜藝】の力か……」

そう呟くと、隊長は力なく倒れ込んだ。

空中に留まりながらそれを確認したラヴォアジエは、視線を他に移した。

視線の先には【ジユール】の姿があつた。

名残惜しそうにその姿を見つめるラヴォアジエ。

「ダダダダダダっ」

そこに息を吹き返したコルベットの隊士たちが、マシンガンで攻撃を仕掛けてきた。

ヤツは攻撃をかわしつつ、蘇えた翼を羽ばたかせ、そのまま夜空の彼方かなたへ飛んでいった。

現実離れした目の前の出来事に、ヘルツは全身の痛みも忘れ、ただヤツが消え去った空を見続けていた。

そしていつの間にか、眠るように意識を失っていた。

ヘルツの話を聞き、ジユールは息を飲んだ。

「信じられないかもしれないが、今話したことは本当です。痛みで何度も気を失いそうにたつたけど、あの時現れたヤツの姿は、今でも鮮明に思い出すことができる」

そう言つヘルツの目が、嘘でないことを物語つている。

ヘルツの話を聞いたジユールは、完全に言葉を失っていた。

そして右目奥に感じている痛みが、ズキズキと強さを増していった。

「でもねジユールさん。今日あなたに会って一つ分かったことがあります……」

ヘルツは黙り込むジユールに続けた。

「正直あの日以来、あなたに会つのが恐かつた。あのラヴォアジエと呼ばれるヤツが、あなたを見る目は特別なものに思えた。それに俺たちと戦ったヤツが最後にジユールさんに言つたあの言葉……。何だかジユールさんが俺たちと違つたものになつてしまふんじゃないか、そう思えて仕方なかつた。ジユールさんの体、ボロボロでとても動ける状態じゃなかつた。それなのに起き上がり、走り出して。動けないでいるヤツよりも、敵であるはずのヤツよりも、あの時のジユールさんはとても恐しく思えて。それにあの光る右目は……」

ヘルツは、胸に詰まつていた思いを吐き出すよう一気に話した。

「だから出発の日の今日、最後にあなたの顔を一眼見て、あなたと話をして、あの日感じたことを、今もまだ感じてしまうのか確かめたかった。あんたが本当に変わつてしまつたのか確かめたかった。そして分かつた」

ヘルツはにつこりと微笑んだ。

「ジユールさん。あんたは何も変わつていない。やっぱりあんたは俺の知つてゐるジユールさんその人だ。少し体は頑丈になつたかもしれないが、あんたから伝わつてくる感じは何もかわつていない。俺は頭悪いけど、ガキの頃から不思議と勘を外したことがない」

汽笛が鳴り、間もなく列車が出発することが、流れてくるアナウンスで告げられる。

「困つたことがあれば俺に声かけるつて、いつもジユールさん言ってましたよね。でもねジユールさん。あんたの方こそ、何か気なことがあることがあつたら、自分で抱え込まずに、俺たちに相談してくれ

ださい。みんなあんたの事を心配しています。東部に向かう前、俺の見舞いに来たマイヤーさんはジユールさんの事をすぐ気にかけていました。口には出さないけど、ガウスだって同じです。あいつは顔を見ればすぐに分かる。それに、さつき俺とガウスに言いましたよね。俺たちは共に死線をぐぐり抜けて来た仲間だつて

「ヘルツ、お前……」

「ヤツが言った言葉の意味は分からぬ。それにラヴォアジエのあの眼差しの意味することも知らない。だけどジユールさんはジユールさんだ。たとえあんたが何者であろうと、俺は、俺たちはあんたの味方だ。戦場ではいつも先頭に立ち、誰よりも危険に身をさらして、俺たちを守ってきた。危なっかしくて見てられなかつたけど、追いかけるジユールさんの背中は心強く、どんなに苦しい時でも、進むべき道を示してくれた」

ジユールから目を離すことなく、ヘルツは話続けた。

「それにジユールさん、あんたはその身を犠牲にして俺を守つてくれた。俺にとつてあんたは命の恩人だ。それは紛れも無い眞実だし、俺のあんたに対する信頼と感謝の気持ちは搖ぎ無いものです。あんたは俺にとつて誰よりも輝いて見える、憧れの存在だ。それはこの先もずっと変わりはしないでしよう」

ヘルツは今にも溢れ出そうな涙を、その瞳に浮かべていた。

「苦しみに耐え続け、無理やり前に踏み出すばかりじゃ、この先とても正気を保つてなんかいられやしない。だからこそ、悩みがあるなら相談して欲しい。自分一人で抱え込まないで欲しい。あんたも【人間】なんだ。この先も変わらず、ずっと俺の目標であつてほしい。だから……」

声を詰まらせたヘルツの目からは、大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ありがとう、ヘルツ」

ジユールは、心の底から感謝の言葉を述べた。

ヘルツが必死に打ち明けたその思いは、ジユールの心に十分過ぎるほど沁み渡った。

「お前こそ、ラングレンに行つて何かあれば、すぐ俺に相談しろよ。ジユールは微笑み、ヘルツに優しく言った。

「その笑顔が見れて、安心です」

出発を知らせる汽笛が鳴り、ヘルツは列車に乗り込んだ。「もつともつと腕を磨いて、いつか俺もトランザムに行きます。それまで待つてください」

「ああ、楽しみに待ってるよ。お前の強さなら、すぐに来れるさー。」再度汽笛が鳴り、列車はゆっくりと走り出す。

列車の窓を開け、ヘルツは最後に言った。

「お元気で、また春に会いましょう。それと……」

少しためらつたが、ヘルツは続けた。

「テスラさんには気をつけてください。の人からは、よく分からないけど違和感を感じます。表面上は以前と変わらないけど、あの日ジユールさんに刀を向けたこと、そしてコルベットに入ったこと……」

言葉に詰まるヘルツの思いに、ジユールは優しくも力強く答えた。「分かった。大丈夫、心配するな。確かにテスラのことは俺も^{きが}気懸かりだが、あいつも俺たちの仲間だ。あいつが何を考えているのかは分からぬが、近い内にちゃんと話してみる。何かあればお前たちに相談するさ」

列車は走るスピードを徐々に上げ、小走りで走るジユールとヘルツの距離をあけた。

「ありがとうヘルツ、全て話してくれて。元気でな、また会おう」「ジユールさんこそ、お元気で！ 結婚式、楽しみにしてます！」

ヘルツは走る列車の窓から身を乗り出し、敬礼をした。

それに応えるよう、立ち止まつたジユールも敬礼をした。いつの間にか、右目^の痛みが引いていたことにジユールは気付いていた。

どんよりとした曇り空の下、粉雪が舞い降り始めていた。

走り去る列車を見えなくなるまで眺め、友との別れに一抹の寂しさを覚えていたが、それでも何故かジユールの気持ちは少し晴れた気分だった。

ヘルツから聞いた話を少し思い返した。

ラヴォアジエと呼ばれるヤツが、自分に対してなぜ優しくも哀しい眼差しを向けたのか。その理由はまったく分からなかつたが、なぜかジユールは安らぎを感じた。

「けつこう降つて來たな。この感じだと、だいぶ積もりそうだな」ジユールは次第に強まる雪を見ながら、帰り路につこうとした。

その時、

「ジユール。ジユールじゃないか」

人ごみの消えたホームで、一人の老人がジユールに声をかけた。

「あつ、グラム博士」

真つ白い髪^{ひげ}をたくわえた小柄^{こがら}なその老人は、微笑みながら、ゆっくりとジユールに近づいて来た。

ジユールは不意に現れた老人に少し戸惑つたが、その表情は親しみで綻んでいた。

「お久しぶりです【グラム博士】、元気そうでなによりです。でも昼間からこんな人目の付く場所に出歩いてちゃまずいですよ。もつと自分の立場を弁えて下さい」

「いやいや、ラングレンから古い馴染みが来ていてな。そいつを見送っていたところじゃよ。それに六倉に籠つてばかりじゃ息苦しゆうて敵わんよ。そう言つお前こそ、こんな所でどうしたんじゃ」

「ヘルツがラングレンに転勤になつたんで、それを見送りに来てたんです」

「ほう、あの駆けつこの早い小僧がのつ。仕事とは言え、付き合いが長かつただけに残念じやな。」

「ええ。でもあいつなら何処に行つても一人でやつていけるはずです」

「そうじやな。ところでジユール、お前今日は暇か？　久しづりの再会じや、暇なら少し付き合わんか」

「別に構いませんが、俺一応軍の人間なんで。誰かにお尋ね者の博士と一緒にいるの見られると、あんまり具合良くないから、どこか人目のかない場所へ行きましょう」

二人は足早にタクシー乗り場へ向かつたが、あいにく行列ができていた。

行列の最後尾にならびながら、ロータリーの中央に立つ女神像を見て博士が言った。

「来年の今頃は【ルーゼニア教創設千年の記念祭】で首都ルヴェリ工は更に賑やかになるじゃろつのう」

「そうですね。俺はルーゼニア教の信者じゃないけど、千年祭は楽しみにしてますよ」

「お前はどうしてルーゼニア教に入らないんじゃ？」アダムズ王国唯一無二の教えじやぞ。國を支える軍人なら尚更入ったほうがよからうに」「

「博士に言われたくないですよ。育ての親の博士自身が入つてないのに、どうして俺が入るんですか。それに何だか神様に縛るつていのが、どうも生に合わないって言うか。最終的には自分自身の力で乗り越えるしかないんじゃなかつて思うし、そうするとなかなか信じる氣にもならないですよ」

「ほう、大した考えじゃな。じゃがわしはなジユール、あの女神ヒュパティアのなんとも言えない切ない表情を見ると、その教えはどうあれ、ルーゼニア教に入つても良いかと思えてしまえてのう」

「でもそれはあの女神像の顔がそう見えるだけでしょ。それだけで入会するつていうのは馬鹿げてますよ」

「お前はルーゼニア教を発祥させた女神ヒュパティアが、人間に対しなぜその教えを広めたか知っているのか」

「教えを広めた理由は知りませんけど、愛・勤・節の【心の三区分】くらいは知つてますよ。確かにこの教えは良いことだと思いますが、これだけ科学が発達した世界で、いつまでも神様を崇めるのはどうしたもんかと」

「科学者のわしがルーゼニア教を肯定し、軍人のお前が否定するのもおかしなものじゃな。じゃがなジユール、これだけ科学が進歩しても、まだまだ解き明かすことのできない事が、世に数多くあるのも事実じゃて」

「話の途中ではあつたが、順番が来たためタクシーに乗り込んだ。博士が行き先を説明している間、ジユールはタクシーの中から、女神像の顔を眺めた。

ルーゼニア教を創設したとされる女神ヒュパティアは、アダムズ王国に伝わる神話にて【天地開闢の三柱】と呼ばれ、世界を造った三神の内の一人であり、その中でも人間を含む、全ての動植物を生み出した【生産の神】として崇められていた。そんな女神像の眼差

しは確かに切なく、またどことなく哀しく感じられた。

そして何故だかその感覚が、ヘルツから聞いたラヴォアジエと呼ばれるヤツが、自分に対して向けた眼差しと重なつて思えた。

(確かにヤツの正体もよくわかつていなし、世の中は科学で解明できていない事のほうが、まだまだ多いのかも知れないな。ヘルツの外したことのない勘だつて何の根拠も無いし、それに俺の体も……)

ジユールは女神像を見つめながら、月夜の戦いで短刀が刺さった肩を強く握つた。

「そう言えばジユール、お前もつすぐ結婚式じゃな。いつの間にかお前も大人になつたのう」

「あつ、そうですね。ぜひ博士にも参加してほしいんですけど、お尋ね者の博士を呼ぶわけにはどうも……」

グラム博士から突然振られたの結婚の話に、ジユールは少し困惑した。

「気にするな。お前たちが幸せなら、わしはそれだけでええ。幼き頃よりお前達一人を見てきたわしじゃ。今更何も心配しておらんし、式など出ても退屈なだけじゃ。結婚式など、神よりも非科学的じやしな」

「ハハッ、愛情は古来より科学で解き明かせない、一番の謎ですね」
他愛のない話をする一人を乗せたタクシーは、徐々に降り方を強める雪の中を、田的に向けて走つた。

しばらくするとタクシーは、首都ルヴェリエの中でも最も疲弊しているスラム街に到着した。

高度な文化を構築するアダムズ王国は、大多数の国民が高い水準の生活を営んでいる。しかし、その流れから取り残された一部の民達は、こつしたスラムで貧しさを共有し、お互いの傷を舐め合つようく生活をしていた。

街の安全を守るはずの警察部隊の目が届きづらっこもあり、非

常に治安が悪く、また街全体が不衛生であり、様々な病が蔓延するなど、一般の市民からは遠く距離を置かれていた。

だがそれが逆に、犯罪者や訳有りな者が身を隠すには最適な場所でもあつた。

今にも崩れそうなビルが密集する場所で、グラム博士はタクシーを止めるよう指示した。

タクシーを降りた二人は、そのビルの中の一つに入つた。

薄暗く湿つた空氣の充満するビルの中は、何かが腐つたような異臭が漂い、とても人が住む場所とは考えられなかつた。ただ、博士の後をついて歩くジユールの足取りはとても軽やかだつた。

なぜなら荒みきつたこの街は、ジユールがまだ幼き頃、グラム博士と共に過ごした場所でもあつた。

「この胸クソ悪い感じ、懐かしいな。十年ぶりだけど、この街はホントに何も変わってない。でも博士、いつこの街に戻つたんです?」「半年ほど前じゃな。ちとファララデーに用事があつてのう。じゃがあいつは死んでしまつてからに……」

グラム博士は言葉に詰まり、少し無言になつた。

階段で四階まで上がり、か弱い蛍光灯の明かりが照らす廊下を少し歩くと、全面錆さびだらけのドアの前で止まつた。

博士はそのドアのカギを開けると、ジユールに言つた。

「さあ、入れ」

錆だらけのドアは見た目からの予想に反し、軽い力で開いた。

部屋に入るとそこは、狭いながらも小さな研究室になつていた。

「大した設備は整つてないんじやが、今はここがわしにとつての城じやな」

ジユールはふと壁に貼つてある写真を見た。

少し古い写真だつたが、そこにはグラム博士とファララデー、そしてジユールの知らない二人の男性が写つていた。

二人内の一人は浅黒い肌をした健康的な顔立ちであり、もう一人は対照的に青白く瘦せこけた顔をしていた。

そしてジユールは後者の男性をどこかで見たような気がしたが思い出せなかつた。

「ほれ、ジユール」

グラム博士は呼びかけたジユールに向け、親指の先ほどの大ささをした小さな赤い玉を投げ渡した。

「何です、これ？ また訳の分からぬもの作つたんですか？」

「何を言つちよる、お前十分世話になつとるじやろ。そりや見たままの爆弾じやよ。大きさは今までの十分の一じやが、威力は倍じや。飛躍的に軽量化とコンパクト化を成し遂げたのと同時に、性能まで上げたのじや」

「凄い、これ凄いですよ博士！」

「説明はまだ途中じやて。こんなことでも驚いてたら最後までもたんぞ」

「一七一七しながら博士は続けた。

「赤・青・黄・緑・橙・灰の全ての玉で同様の変化をとげちよる。まあお前の言つちよつた科学の進歩とゆづりやつじや。やひこそれだけじやない、おまけも付けとる」

「何ですか？」

「今までの玉は直接その玉を銃で撃つなどして、衝撃を加えて初めて発動したものじや。これは戦闘状況においては使用者や部隊にリスクが有り過ぎる。そこでじや」

博士は黄色の玉を取り出し、一瞬その玉を壁に擦りつけた。

「3・2・1……」

そう言つてから博士は黄玉を放り投げた。投げられた玉は空中で凄まじい閃光を放つた。

「急に何するんですか、眩しいですよー」

まさかと思い事前に目を閉じたジユールであつたが、それでも強い光を感じ、たまらず叫んだ。

「まあまあ、そう目くじら立てるな。聞くより見るが易しじやからのつ。見ての通り、时限タイマー機能を追加したのじや」

田を丸くするジユール】に対し、グラム博士は得意げに言った。

「手に持つ赤玉を見てみるのじや。玉に一周細い線が描いてあるじやろ。この線の方向に玉を壁に擦りつけるなどして摩擦熱を加えるのじや。熱を加えたら3秒後に発動じや。もちろん今まで通り、直接衝撃を加えることで発動させることもできるのじやが、対象が小さくなつたから狙うのが大変じやろうと」

グラム博士は机の引き出しを開け、一冊のノートを取り出した。「このノートに作り方が書いてある。これを【ヘルムホルツ】に渡すのじや」

「ヘルムホルツにですか。あいつは軍人でありながら【アダムズ王立協会】の会員ですよ、いいんですか？」

「今やこの国の科学者で、わしが信頼できるのはあやつだけじや。あやつはお前と同じでこのスラムの出じやる」

「確かにヘルムホルツは良いやつだし、ガキの頃に俺とマイヤーと一緒にこの腐った街で育つた仲です。でも王立協会は、自らの発明品が戦争の道具になることを嫌つた博士を追放し、さらに犯罪者扱いまでしている組織ですよ。その一員であるあいつは、こんな重要なものを渡していいんですか」

「お前はわしのことを誤解しちょる。わしはただ逃げ出しただけじやよ。アダムズ王立協会はこの国の科学者団体の頂点であるのと同時に、国の行政にも大いに影響をもつておる。協会での立場が上がりば上がるほど、自分の意思とは関係無く、そんな政治活動にまで首を突っ込まなければならんのじや。わしは政など真っ平じめんじや。じやが辞めようにもわしは協会のことを深く知り過ぎてしまつた。そんなわしを協会が黙つて見送るわけ無いじやろ。わしは怖くなつて逃げ出したのじや。それにのう……」

博士は何かを続けて話そうとしたが、気難しい表情で話題を逸らした。

「これ以上話すとお前の軍人としての立場が悪くなるやも知れん。まあどんな組織にも裏の部分はあるものじや。知らないくて良いもの

は、知らぬほうがええ

煮え切らない表情をするジユールに、博士は言った。

「 そう心配せんでも大丈夫じゃ。仮にこのノートが他人の手に渡つたとしても、大したことではない。所詮わしの作ったこれらの玉は時代遅れの産物じや。現在この世界で最高の頭脳を持つ科学者【ラジアン博士】が次々に開発している電子兵器の前では、だれも見向きせんじやろ」

「 でも博士の作った武器があつたからこそ、俺たちはヤツを倒すことができたんですよ」

「 じゃがその戦いでファラーテーは死んだのじやろ。あいつもまた、このスラムの者じや。残念じやよ……」

グラム博士は壁に貼つてある写真を哀しげに見つめた。写真に写つている四人の顔は、とても楽しそうだった。

ファラーテーはジユールよりも一回り年上だったが、同じスラム出身といふことで、軍では特にかわいがられた。

厳しさの中にも愛情があり、ファラーテーは多くの部下から慕われていた。戦闘技術も非常に高かつた彼は、コルベットやトランザムから幾度となく配属を打診されていたが、なぜかそれを受け入れようとした。

常に戦場で若い隊士の先頭に立ち、的確に任務を遂行する彼のことをジユールは尊敬し、兄の様に慕っていた。

そんな彼があの夜、無残に首を切り落とされ絶命したことを、ジユールはまだ少し信じられずにいた。

ジユールは徐に博士に尋ねた。

「 博士、【ヤツ】とは一体何者なんですか。博士なら何か知ってるんじゃないですか？」

ジユールからじつと見つめられた博士は、少し困惑した表情を浮かべ黙つていたが、その訴えかける視線の力に屈つしたのか、ゆっくりと話し始めた。

「お前も知つとるようやツとは人外の者の総称じや。わしら人間はその想像を超え、かつ危害の対象となるものについて、忌み嫌う性質を持つてゐる。特にヤツの化け物じみた姿が人々にとつて、恐怖の対象としか写らず、何のためにヤツが存在するのか考えもせんで、その存在自体を輕蔑視する【ヤツ】と呼んだ」

「でもヤツは、多くの人の命を残酷に奪つている」

「ヤツが初めてこの国で目撃されたのは、二十年以上前のことじや。現在までに十体ほどのヤツが確認されどるが、人の命まで奪つたのは一番初めに出現したヤツと、お前たちが倒したヤツの二体だけじや」

「……」

「それ以外のヤツは、まったくと言つていいほど人に對して何の危害も加えていない。いやむしろ人を助けた記録も残つてあるくらいじや。全てのヤツが消息を絶つてゐる今となつては、本当か否か定かではないがのう」

「確かに今回現れたヤツも、初めは人に対して危害を加えることはなかつた。ただ今までと異なる点は、同時期に分かつてゐるだけでも三体のヤツが現れています。一度に複数のヤツが現れたことは過去においても一度もありません。三体のヤツがそれぞれにを目的としているのかは不明ですが、一番目に現れたヤツが初めに人を傷付けた。それを機に他のヤツも人に対し危害を加えるようになった。そして我々にヤツの抹殺命令が下つたのです」

「一番目に現れたヤツが危害を加えたのは、協会の科学者じゃつたと聞くが本当か？」

「ええ、本當です。ただあまり上層部の方ではなかつたらしく、名前までは覚えていません」

「所説によれば、ヤツの知能は成人の人間と変わりないといふことじや。闇雲に人を襲うとは考え辛いのじやが」

「我々軍人は上の指示に従つだけで、ヤツの気持ちまでは考えません」

その言葉とは裏腹に、ジユールはヤツの最後に口にしたあの言葉の意味を考えていた。

今回三体のヤツが同時期に出現したわけだが、初めの一體以外は出現後早々に姿を消した。だがその一體だけは首都ルヴェリエの中

心に残り人を襲っていた。

「ヤツについてはまだまだ謎が多い。それはヤツとの接触が極めて少ないことも要因の一つじゃ。じゃがお前達はヤツを倒した。これは過去においても初めてのことじゃ。その死骸を調べれば何か解るかも知れんがのう」

「でもヤツは死んだ後、人の……」

ジユールは言葉を飲み込んだ。

首を落とされ、息絶えたヤツの姿が人のものへと変化したことが、ジユール自身今だ半信半疑だつたため、その事を博士に伝えることに躊躇した。

「まあ良い。いずれ事の真相は誰かが解き明かしてくれるじゃろうて。ただ一つ言えることは、人は身勝手な生き物じやということじや。人知を超える存在が目の前に現れたとして、それが女神ヒュパティアのような美しい姿をしておれば、神と崇めるじやろ。逆にヤツの様な醜い姿をしておれば、その容姿から悪魔の化身であるかのごとく、理由も無しに排除の対象にしてしまい、事の真相を見極めようとしない。寂しいものじや」

ジユールは博士の言つた言葉にうなずいた。ヤツの行動には何か理由があつたはずだ。あの夜のヤツの眼差しからは、訴えかける何かが伝わってきたし、その理由が知りたかった。そしてその理由を知れば、最後に口にしたヤツの言葉の意味が分かる気がした。

そんなジユールはふと、ヤツのこと優しく想い語るグラム博士を不思議に感じた。

「でも博士。どうして博士はヤツのことを、そんな風に想うのです

博士は何かを思い出すように言った。

か

「……そうじゃな。わしは自分が小さい頃に読んだアダムズ王国の神話が好きでな。これはルーゼニア教の教えにも語られている事なんのじゃが、わしの心の深層にこの話が根付いているからかも知れん」

神話やルーゼニア教において、天地開闢の三柱とは至高の神と呼ばれる【絶対神ソクラテス】と、その弟で征服や統治の神と呼ばれる【想起神ブレイトン】そして生産の神の【女神ヒュパティア】の三人を示唆する。

絶対神ソクラテスと女神ヒュパティアは夫婦であり、天界で暮らしていた。

その時大地はまだ現在のような型を留めていなかつたが、想起神ブレイトンはその大地に暮らしていた。

ある日ブレイトンはこの大地を今後どうしていくか相談するため、ソクラテスとヒュパティアを呼び寄せた。

ところがブレイトンは、大地に降り立つたソクラテスの首を絞め殺してしまった。ブレイトンは兄の妻であるヒュパティアに対し、密かに思いを募らせていた。そして兄を殺し、自分の妻となるようヒュパティアに言った。

しかしヒュパティアはブレイトンのそんな想いに応じるはずもなく、ソクラテスの亡骸を胸に泣いた。

七日間泣き続け、流れ出たヒュパティアの涙は大地を覆い、やがてそれは海になつた。

ヒュパティアの涙は枯れ果てたが、最後に左目から三粒、右目から五粒の七色に輝く涙が零れ落ちた。

その涙がソクラテスの亡骸の上に落ちると、涙から新しい神々が生まれた。

左目から流れ落ちた涙はそれぞれ、銀の鷲、黒い獅子、紫の竜の姿をした神となり【燐貴神】と呼ばれた。

右目から流れ落ちた涙は、狼の頭を持つ修羅、鴉の羽を持つ夜叉、白面金毛九尾の狐、一角尾蛇の虎、そして星の弓を持つ熊の姿をし

た神となり【護貴神】と呼ばれた。

燐貴神は攻撃神となり、ブレイトンと激しい戦いなつた。

護貴神は守護神として女神を守つた。

ブレイトンは想いが届かないことに嘆いたが、燐貴神に対抗するため、三人の巨人の姿の神を生み出した。

百年にも及び戦いは続いたが、決着は着かなかつた。

このままでは、いつまでたっても戦いが終わらないことを感じたヒュパティアは、ついに自らブレイトンに立ち向かう決意をした。そんな女神は別れを告げるよう、亡骸であるソクラテスの鼻に優しく口づけをした。

すると突然ソクラテスの体が眩^{まばゆ}までの光を放ち、巨大な剣へと姿を変えた。

その剣は大神剣【素盞^{すさのおひ}王】と呼ばれ、ヒュパティアはその大神剣でブレイトンを倒した。

しかしブレイトンが死んだことで、三人の巨神が暴走を始めた。燐貴神は巨神の暴走を食い止めるため、必死の攻撃を加えた。

やがて燐貴神は力の弱つた巨神を食い殺し、百年ぶりに、大地に平静を取り戻すことができた。

だが今度は巨神を食べた燐貴神が暴走を始める。燐貴神は食い殺したはずの巨神に、心と体を支配させていたのだ。

ヒュパティアは護貴神にその身を守らせつつ、天に向け祈りを捧^{ささ}げた。

すると天高く輝く太陽より、三本の【光の矢】が放たれ、暴走する燐貴神を打ち抜いた。

ヒュパティアは身を守らせいた護貴神についても、いつ暴走する神の力は封印された。

ヒュパティアは身を守らせいた護貴神についても、いつ暴走するか分からないと、天に向け祈りを捧げた。

すると今度は夜空に輝く月より、五本の光の矢が降り注ぎ、護貴神の体を打ち抜いた。

護貴神もまた、その姿を【勾玉】の形に変え、神の力は封印された。

その後燐貴神の封印された鏡は【天照の鏡】と呼ばれ、護貴神の封印された勾玉は【月読の勾玉】と呼ばれた。

ヒュパティアは大地にある最も高い山の頂に神殿を建て、そこに天照の鏡と月読の勾玉、それに大神剣素戔王を祀つた。

やがてヒュパティアの流した涙からできた海より、人間を含む様々な生命が誕生する。

ヒュパティアは人間に對し、自ら体験した苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑制するため、愛・勤・節の【心の三区分】の教えを唱えた。

『人の心には愛情・勤勉・節制があり、その調和を図ることで苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑えることができる。自分や他人に対し愛情を育み、自分に課せられた仕事に一生懸命取り組み、決して他人を侵害してはなりません。そうして皆が調和を図れば、世界の平和は永遠のものとなるでしょう』

この教えの流れを組むのがルーゼニア教であり、この国の礎となつていた。

「神話にもあるように、女神ヒュパティアの流した涙から生まれた神々は、人よりも獣の姿に近いのじゃ。それ故わしはヤツのことを考へると、人外の悪魔というよりも、本当は人間よりも【神聖な血筋の持ち主】なんじゃないかと思えてしまうのじゃよ」

「最後に神々の力を封印した鏡と勾玉、それと大神剣はどうなったんですか」

「神殿に雷が落ち飛び散ったとか、盜賊によつて持ち出されたなど所說あるんじゃが、世界の各地にバラバラになつたことは共通している。じゃがこれもお伽噺の範囲であつて、実物を見たものはおらん」

「そうですか……」

「どうした、何か気になることでもあったのか？」

ジユールは神々の力が封印されたとされる、神器のことが気になつていた。特に月読の勾玉のことだ。

ヤツが口にした【シクヨミノカナデ】という言葉と、神話に出てくる【月読の勾玉】という神器。そして博士の言った【神聖な血筋の持ち主】という言葉。ジユールはそれらが繋がつているような気がしてならなかつた。

「グラム博士、【シクヨミノカナデ】ってご存知ですか？」

無意識にジユールはヤツが最後に口にした言葉を博士に訪ねた。

博士は少し驚きの表情を見せつつジユールに言った。

「ほう、お前も少しは神話を知つていてるようじやのう。それらの神器には続きがあつてな。【シクヨミノカナデ】とは【月読の奏】のことで、月読の勾玉に封印した神の力を解き放つものじやとされてゐる。言い伝えでは勾玉と同じ大きさの胎児たいじを宿す妊婦が、満月の光を浴び光輝く月読の勾玉を見ると、その胎児に神の力が宿ると言われておる。月読の奏がどういったものなのかなは不明じやが、神の力が宿つた者がそれを【感じる】と、その者は封印されし、神の力を自由に使うことができるということじや」

「【感じる】つていうのはどうゆうことですか？」

「それは分からん。神話にもルーベニアの教えにも【感じる】という表現しか伝えられていないからのう」

「結局は伝説の中の話というわけか……」

少しばかりが得られるかと期待したジユールであつたが、曖昧さの残る後味の悪さを感じた。

それでも彼は神話の中に、自分が無意識の内に追い求めている【何か】があるのでないかと思えた。

「ずいぶんと辛氣臭い話になつてしまつたのう。話を戻そう。わしがお前をこの研究室に呼んだのは、新しい玉の作り方を記したノートをヘルムホルツに手渡すよう頼むこと。そしてもう一つ」

グラム博士は嚴重なセキュリティが施された、金庫のような鋼鉄

の箱のカギを開け、その中から見たことの無い色をした玉を取りだした。

「わしが現在開発しておる四つの玉じゃ。一一つはすでに完成しておる。一つは発動せるのに条件付きじゃがほぼ完成じゃ。残り一つはあと少しどうたところかのう」

グラム博士は、取り出した四種類の玉をジユールに手渡した。

手渡された玉は、白い玉が七つ、桃色と銀色の玉がそれぞれ五つ、そして金色の玉が一つであった。

「それらの玉はお前が持つておれ、ジユール。そして時が来るまで大切に閉まつておくのじや」

そう言つなり博士は玉を保管するためのカバンを、半ば無理やりジユールに押し付けた。

「そんな大切な玉なら、『自分で持つていればいいじゃないですか。何か責任を押し付けられてるみたいで嫌ですよ、俺』

「わしは時機にルヴェリエを離れる。この研究室も処分し、わしの痕跡を跡形もなく消すつもりじゃ。じゃがせつかく作ったその玉を捨てるわけにもいかんし、わしが持つていても、いつ協会の者や警察部隊に連行されるかわからんからのう。最近は協会の田を撒^まくのがしんどくてな。なるべく身軽でいたいんじやよ」

「ですが博士……」

ジユールは少し嫌な予感がした。何故だかもう、博士とは一度と会えない様に思えた。

「ジユールよ」

博士は困惑するジユールの気持ちを察したのか、優しく語りだした。

「わしら科学者は万物において、何かと理屈をつけたがり、また根拠を求めるものじゃ。では何故そうするのか。それは安定を図るためにじゃよ。現実世界における全ての物理現象は、何かしらの理論や法則の元に成り立つておる。その理論ないし法則を導き出すことが、言い方を変えると安定を図ることになるのじや。そして安定

を図ると安心する。この安心感を達成感と感じる者も多いが、それは同一であつて、わしら科学者はその安心感がたまらんのじやよ。一度その感覚を味わうと、また別の安心感を求め、まだ安定していない不安定要素を探す。そうして次々と新しい理論を導き出し、それが科学の進歩として今に至つておるのじや。じゃがこれは決して科学者だけに言えることではなく、一般的の者たちにも言えることじや。この世の中にはまだまだ原因不明な事や、想像を絶する現象が多々あり、そういういた意味不明な、言わゆる不安定要素は不安や恐怖を感じておる。常に不安や恐怖と隣り合わせの環境の中で生きて行くために、人々は無意識に安定を図つておる。その一例が宗教じや。人々は原因不明な不安定要素を無理やり安定させるため、逆に【神】という不確定要素を祀り上げバランスを図つておる。それが心の安定に繋がり、そこから感じる安心感が、信仰という形になつておる

「……」

「わしも若い頃は、その安心感という麻薬に取りつかれてのう。誰も解き明かせなんだ難問があれば、我先にその問い合わせにのめり込み、その解を導き出しても安心感と達成感を味わつておつた。そして難しい問題を解説すればするほど、周囲からも称賛され、心地よい気持ちになつた。歳の変わらん【世界最高の天才】と謳われるラジアント博士に負けんと、周りが見えぬほど夢中になつて研究に没頭した。そしていつしか周囲はわしのことを【世界最高の鬼才】と呼んでおつた。有頂天じゃつたよ。グラム博士ならどんな物もすぐに現実の物にしてしまふと煽^{あだ}てられ、様々な開発を行つた。わしの作った物は世の為になると疑わず、望まれた物を次々に形にした。じゃが気付けば、わしの生み出した発明品は、その用途を応用され、殺人兵器として軍の武器に姿を変えていた。

わしの発明した物が、多くの人の命を奪つていく。いつしかそう思つようになり、わしは何も考えられなくなつてしまつた。人といふのは冷たい生き物でな、そうなると周囲の人間はわしにまったく

目を向けなくなりおつた。わしは自分の存在価値を見失い、また人間不信にも陥り、自暴自棄になつた。人の心はどう足搔いても、解き明かすことはできず、意味の分からぬ不安と焦りで、完全に自分を見失つておつた。そして死を決意した

「博士……」

「じゃがわしは小心者でな。自殺するのが怖く、誰かに殺めてほしと思ひ、気が付くとこのスラムに来ておつた。今日のように雪の降つてある寒い日でのう。長い時間スラム中を歩いたのじゃが、寒さのせいか人つ子一人おらんでのう。歩くのも疲れ、どこかで休み、そのまま凍死するのも良いかと思つておつたが、どこからともなく赤子の泣く声が聞こえてのう。気が付けば、その泣き声のするほうに足が動いておつた。小汚いドブ川に掛かる橋の下にその赤子は捨てられておつてのう。寒空の下、死ぬこと以外未来のないこの赤子が不憫に思え、一思いに樂にしようと、わしは懐から持ち合わせておつた短刀を取り出した。今思えば、なんてことをするんだと冷静に考えられるが、その時のわしは完全にどうかしておつてな。じゃが赤子に向け短刀を振り上げると、何とその赤子は微笑みよつてな。まさか自分を殺そうとしている相手に対し、その赤子は感謝している様にわしには思えた。わしはそんな赤子に、短刀を突き付けることができなかつた。孤独感に苛まれ無力な自分が嫌になり、自分勝手に命を絶とうとしたわしに、わしよりも遙かに孤独で無力なその赤子の微笑みは、なぜか安心感を抱かせてくれた。そしてその安心感は、今までわしが感じたどの安心感よりも心地よく、温かいものじゃつた。そうなると、今まで死のうとしていたことが急にバカバカしく思えてのう。思い直し、わしは生きることに決めた。そしてこの先生きる糧としてこの赤子を、わしの子として育てようと決めた。そう、その赤子が【ジユール】お前じや

グラム博士は今まで黙つていた、ジユールを育てた理由を初めて語つた。

ジユールは博士のことを良き父であり、また偉大な科学者だと思

つっていた。そして博士は誰よりも強い人だと思つていた。そんな博士が意外な弱さをさらけ出し、かつ大きな挫折をしていたことを知り、少し驚いた。

「もちろん独身だったわしは、子育てなど経験が無い。何をするにも苦労が絶えなかつた。科学者のわしは、お前が泣き止まないと、なぜ泣くのかどうしてもその原因を探つてしまつた。じゃが赤子に理屈はないのじゃ。時間はかかつてしもうたが、共に泣き、共に笑う。そうしてただ親の愛情を注ぎ続ければよいのじゃと、わしは気付いた。温かく見守りながら、子供の成長を身近に感じる。そんな感覚が、科学の追及しかして来なかつたわしを、ずいぶん人間らしく変えてくれた。全てを科学の力で解き明かすことができる、疑わなかつたわしの考えが、いかにちっぽけなものだということを、お前は教えてくれたのじゃ。全てを型に収めることは、とても安定しているように思えるが、実は無理やり全てを型に収めるほうが歪ゆがんでいることであり、実際そんなことは不可能なのじゃ。大切なことは、全てをありのまま受け入れることなのじゃよ」

優しく語る博士の言葉の一つ一つから、ジユールは自分に対する博士の愛情の深さを感じ取つた。

そしてジユール自身も、博士に対する敬意と感謝の気持ちを正直に伝えた。

「グラム博士が俺の本当の父親でないことは、ずいぶん前から知っています。それでも俺にとって、あなたはこの世で最も尊敬する人間であり、唯一の【家族】です。俺をここまで育ててくれて、本当に感謝します」

「嬉しいことを言つてくれるので。ただ一つだけ、お前に母親の愛情を教えてあげることができる、すまんと思うとる。どうもわしは奥手でな。おなじが苦手での」「

「俺には博士のような【父親】がいてくれただけで、それだけで十分過ぎます。気にしないでください」

「歳を取ると涙もろくなつていかん。次は涙を堪える薬でも発明し

ようかのう「

ヘルツに続き、全てを話してくれたグラム博士に、ジユールは心から感謝した。

そして自分が思っている以上に、周囲の人から大切にされていることを改めて感じ取つた。

「ところでジユール。ファラデーはお前に何か言つちよつたか？」

何か思い出したのか、グラム博士は写真の中のファラデーの顔を見て、ジユールに問うた。

「隊長が俺ですか？ 個人的には特に何も言われませんが……」

ジユールはふと、あの日ファラデーが小隊に出した指示について思い出した。

「そう言えば、あの日のファラデー隊長の読みは冴えていました。ヤツがルヴェリエの中心街に突然現れ、俺たちにその追撃命令が下つたとき、他の小隊はいつも通り電子兵器を主体に装備を整えていましたが、俺たちの隊だけは隊長の指示で、刀や火薬の銃、それに博士の開発した玉型兵器を装備して現場に向かいました。さらに隊長の指示の下、俺たちの隊は密集隊形みつしゅうたいけいで作戦にあたりました。ヤツとの戦闘が始まると、どういうわけか電子兵器が機能せず、またインカムなどの無線も使用できなくなり、それらを主体としていた俺たち以外の小隊は、次々とヤツにやられていきました。逆に俺たちは密集隊形であつたことで、ヤツからの攻撃をそれぞれ援護えんごすることができ、また装備していた武器も問題なく使えたことで、最終的にヤツを倒すことができた。どうしてあの日に限つて、ファラデー隊長がこうした指示を出したのかは分かりませんが、そのおかげで俺たちは今、こうして生きられているのかもしれません」

「本当に、お前個人に何か言つたりはしなかつたのじやな」

先程までの穏やかな表情とは違い、鋭い口調で尋ねる博士に、ジユールは少し圧倒された。

「……ヤツが隊長の体をその太い腕で貫いた時、俺に何か言つたよ

うな気もしますが、あの時は気が動転していてよく覚えていないんです。その後すぐ隊長は首を撥ねられました。何か気になることでも？」

「いや、何もないなら良じのじやて」

ジユールは博士からは何か、自分に隠している事があるのではと感じたが、彼はあえてそれを聞かなかつた。

「そろそろ帰ります。ルヴェリエを発つ前に、もう一度会えますよね」

「そうじやな。ここを離れると、しばらく会えんからなの。その前に都合をつけ、連絡するから待つておれ。それにしても駅で偶然にも今日、お前に会えたことを嬉しく思つづ。この奇跡とも言つべき偶然もまた、科学の理の外側じやな」

「俺も思いがけなく博士に会えたことを嬉しく思います。ノートの件は確実に届けますので心配いらないです。それじゃ、連絡お待ちしています。寒いですから、体調に気を付けて下さいよ。もう歳なんだから」

「お前も元氣でな、ジユール。【アメリカ】にもようじく伝えてくれよ」

ビルを出ると、そこは一面の雪景色へと変わっていた。

何となくジユールは後ろめたさを感じ、博士の研究室があるビルの四階辺りを振り返つて見た。

「考え方か……」

ジユールは振り返り、まだ誰も歩いていない雪の積もった道に、足跡を残しながら家路についた。

ジユールから博士のいるビルが見えなくなつた頃、そのビルを取り囲む複数の黒い影が現れた。

黒い影は、全員揃いの黒い制服を身に着けていた。そしてその中には、テスラの姿も含まれていた。

第四話 余寒の王国

満開の梅の花が人々に春の到来を感じさせていたが、この日は冷たい雨が朝からしとしと降っていた。

ジューールは、アダムズ城内にあるトランザムの待機所で、他の隊士と共にトレーニングを行っていた。

アダムズ軍総指令直轄戦闘部隊トランザムは、ジューールを含む総勢十名の小所帯ではあつたが、コルベットと同じく、全員が軍全体より選抜された、選りすぐりの精銳集団であった。

ただコルベットが貴族や上流階級出身の隊士によつて組織されているのに対し、トランザムはその身分は問わず、ただ腕のみが選抜の対象であった。

それゆえに気性きじょうが荒く、人間性や協調性に問題のある隊士が多かつたため、軍の中でも浮いた存在になつていた。

それでも、その凄まじいまでの【強さ】がその他全てを補い、存在意義を確固たるものにしていた。

「どうした新入り、女の事でも考へてるのかつ」

「べつ、まだまだです。もう一手お願いします！」

口の中に溢あふれた血を吐き捨てながら、ジューールは木刀を持ち直し、先輩隊士に向かつた。

末席のジューールは、何かと先輩隊士より嫌がらせの様な訓練を受けていたが、持ち前のタフさと負けん気の強さで、それらの訓練を耐え抜き、日増しにたくましさを強めて行つた。

そして強引に底上げされる強さを、彼自身も感じ取つていた。いや、強くならねば自分の居場所が無くなることを彼は自覚しており、夢中で剣を振つた。

そんな日々成長を遂げるジューールを、いつしか他の隊士たちも一目置くようになつていた。

何度も叩たたきのめされても弱音一つ吐かずに立ち向かうジューールの姿

を、少し離れた所から見つめる一人がいた。

一人は軍のトップであり、テスラの父である【アイザック総司令】。そしてもう一人が鳥合の衆であるトランザムをまとめ上げる隊長であり、アダムズ軍最強の男と呼ばれる【英雄ドルトン】であった。そんなドルトンの名は諸国に響き渡り、その鬼神の「」とき強さは生きながらに伝説になつてゐるほどであった。

「ジユールのヤツ、少し見ない間にまた腕を上げたようだな。なあドルトン」

「いや、まだまだです。ジユールを見て半年経ちますが、未だいつの伸び代^{しろ}が見えません。故にあいつにはもつと上を目指してもらわねば困りますし、このまま精進^{しゅうじん}し経験を積めば、あいつはいつか、俺を超える存在になれるでしょう」

「ほう、英雄ドルトンにそこまで言わせるか。まあ訓練所時代からあやつに氣を留め^とていた、私の目に狂いはなかつたとも言えるがな。ハハつ」

意気揚々と笑いながら、アイザック総司令はその場を後にした。

「ガキン！」

ジユールは試合ついていた先輩隊士の木刀を跳ね上げ、その喉元に切つ先を向けた。

「まつ、参つたぜジユール。今日はこの辺で終^{しま}いにしようや……」

「ハアハア、ありがとうございました。ハア……」

ジユールは、着実に強くなつてゐる自分に高揚感^{じょうようかん}を感じた。荒く苦しい呼吸でさえ、なぜか心地よく感じた。

それを見ていたドルトンは、自らの予想以上のスピード成長するジユールに目を細めながら、頼もしさを覚えた。

「ジユール、顔を洗つたら俺のところに来い。科学部隊のところに行く」

「ハツ、ハイ。すぐ行きます」

ジユールは配属以来ほとんど口を訊いたことの無いドルトンに、緊張しながらも名前を呼ばれた嬉しさに気持ちが高ぶつた。

王国の英雄であるドルトンはジユールにとつて雲の上の存在であり、そんな彼に声をかけられた事は、ジユールにとつてこの上ない至福しふくであった。

科学部隊に向かう途中、緊張しながら付き従つジユールに対し、ドルトンは優しく語りかけた。

「お前とこうして話すのは初めてだな。お前を監督する立場として、もつと早く話しをしたかったが忙しくてな。なかなか時間がとれず、済まなかつたな」

「そつ、そんな。とんでもありません。俺なんかに気を使わないので下さい」

「ハハハッ。そう緊張するな。隊長が部下と話をするのは当然のことだ。お前のこととは以前よりファラデーから聞いていてな。不器用だが、根性の座つた生きの良い若いのがいると、前々から推薦されていたのさ」

「ファラデー隊長から……ですか」

「俺とあいっは、同じスラム街出身でな。子供の頃は、一人でよく無茶をしたものさ。俺のほうが少し歳上うえだが、あいっはいつも俺に負けんと背伸びばかりしていた」

「ドルトン隊長も、あの街で育つたのですか」

「お前も同郷じきょうらしいな。不思議なことにお前を見ていると、懐かしい感じがするよ。」

「……胸クソ悪い感じですか」

「ハハツ、別に変な意味じやない。お前は俺の昔にそつくりなんだ。あの腐つた街を抜け出し、何の後ろ盾もなく、その身一つで駆け上がりふうと必死にもがく。そんな姿が昔の俺と重なつて見えるのだろう」

「買い被り過ぎです。俺はとても英雄になれるような器うつわじゃありません」

「英雄になるかどうかは、お前が決めることじやない。歴史のちが後に決めることだ。それにお前こそ自分を過少かしように思い過ぎだ。変に期待せん」

をかけるわけじゃないが、俺とファラナーが気に留めた男だ。もつと自分に自信を持つ

「そんな……」

根拠はどうあれ、尊敬する一人より認められていたことに、ジユールは顔を赤らめながら嬉しさを噛みしめた。

科学部隊は軍で使用する武器や防具、また様々な道具を開発・改良している部隊である。

そのトップには、世界最高の天才と呼ばれるラジアン博士があり、軍の組織でありながら、王立協会とも深い関係にあった。

科学部隊の中でも、さらに最新鋭の兵器開発を行っている上層部隊を通常【カプリス】と呼び、最高頭脳を結集したカプリスは、次々と強力な武器を世に送り出していった。

当然軍の最強部隊であるトランザムで使用する武具は、全てカプリスで開発されたもであり、科学部隊に到着した二人は、迷うことなくカプリスの研究所に向かった。

「お前は特注していたバトルスースを取りに行け。俺は別件でラジアン博士のもとに行く。後で俺もそっちに行くからそれまで待つてろ」

ドルトンと別れたジユールは、勝手の分からぬ研究所をうるついていた。

場所を聞くにも白衣をまとった研究者たちが、それぞれ自分の世界に没頭するよう研究に勤しんでいたため、何となくジユールは声をかけづらかつた。本当にここは軍なのかと疑いたくなるほど、異次元の世界に足を踏み入れた感覚だった。

そんなジユールの肩を、ポンポンと誰かが叩いた。

振り向くとそこには、ガウスよりも巨漢で武骨な、一見とても科學者に見えない男が立っていた。

「なにウロウロしてんだ、ジユール。スース取りに来たんだろ。こっちだ、ついて来い」

「お、おう。ヘルムホルツか。助かつたぜ。それにしても相変わらず愛想の無いやつだな、お前」

ジユールは黙々と進むヘルムホルツの後を追い、研究所の隣に併せられた施設^{せつ}である、倉庫のような施設の中に入った。

入口に透明な袋に詰められた、トランザムのものと分かる赤色のバトルスーツが一着壁に掛けられていたが、それ以外施設の中はガランとしていた。

「お前、そこに掛けてあるスーツに着替える。その後は思い切り施設の中を動いてみるんだ。この施設には色々なセンサーが付いていて、お前の動きを分析してスーツが最適な状態になっているのか確認する」

「へえ、凄いもんだな。でも立ち合いはお前一人なのか？」

新しいスーツを手に取りながら、この広い空間に、自分とヘルムホルツの二人しかいない事が少し気になった。

「不満か。お前になんぞ、俺一人で十分だろ。それにそのスーツを作ったのは、俺だしな」

「ほう、たいしたもんだな。どれだけの性能か、楽しみだよ
ジユールは、少しきつめなスーツを着るのに手間取った。

「初めはきついが、すぐにお前の体の形に定着する。このスーツは俺がお前専用に作った完全なプロトタイプさ。^{現在}軍で使用されているバトルスーツの中でも、最新最強の性能を誇る^{ほこ}スーツに仕上げてある。今回お前にこのスーツを渡したのは、新開発のこのスーツの性能を実戦で検証するためだ。そして問題がなければ、その後量産へと移行する」

「なんだよ、それじゃ良い実験台じゃないか」

「当たり前だ。そうでもなければ、こんな最新技術を駆使して作られた大切なスーツを、どうしてお前なんかに渡さねばならん」

「正直に言つてくれるぜ。まあ、お前のそういう何でも馬鹿正直に話すところは、嫌いじゃないがな」

「俺だつて鬼じやない。最初に言つたはずだ、このスーツは【お前

専用】だと。昔から見てきたお前の特徴^{とくちょう}を生かすよう計算して作っている。そしてグラム博士の新技術によつて小型化された玉型兵器を無理なく装備できき、使いやすさを追求したベルトも同時に作製した。すでに玉型兵器は装備済みだ、確認してみろ!「

手渡されたベルトは、腰に巻くベルトと肩に掛けるホルスターが結合した構造になつており、小型のケースがいくつも取り付けられていた。そしてそのケースの中に、小型になつた多数の玉型兵器が仕込まれていた。

「これは咄嗟^{とっさ}の時にも使いやすいな。でも装備されてるこれらの玉も、お前が作ったのか?」

「俺は本来防具専門なんだが、今回はすべて俺一人でやつた。博士のノートには丁寧過ぎるほど細かく詳細が書いてあつたから、思いのほか簡単に作れたよ」

「それにしてもこのスーツ、軽いし動きやすいな。でもこんな薄い物で、防御力は大丈夫なのか?」

「バトルスーツは戦闘時において、制服の下に装備するものだ。それゆえあまりゴツくできん。むしろ薄く軽量化が望まれる。今お前が着ているスーツは、カプリスが最近開発した【KSR-35】といふ新素材で作られている。

これは超軽量纖維^{せんいわき}素材に強硬度^{きょうじゅうど}物質を組み合わせたもので、一般の隊士が身に着けているスーツに対し、約5倍の防御力を誇つてい。小銃程度なら、ほとんどダメージを受けないはずだ。だが特筆すべきは防御力ではなく、身体能力^{じゆしづうりょう}加速機能だ。この機能はアダムズの基本理論である【光子相対力学】の作用を用いて、装着した者の身体能力を高める働きを持つている。

ただし反動も大きく、使用者に相応^{そうちょう}の肉体的負担がかかる。そのためこの機能の付いたスーツは現在、屈強^{くつきよ}な肉体を持つ精銳^{せいえい}集団である、コルベットとトランザムにのみ配備^{はいび}されている。それでも現状では使用者の負担を考え、約2・5倍程度の能力アップに機能を抑制^{よくせい}している

「それで、このスースはどうなんだ？」

「KSR-35はその軽さと丈夫さに加え、優れた緩衝機能が備わっている。そのため装備した者への肉体的負担を、著しく低下させることができるんだ。机上での予測では、少なくとも3・5、いや4倍はいける筈だ。ただ実際のところは使ってみなければ分からん」「そこで俺が実際に使ってみると、何というわけか。ところで左手首についているこれは何だ？」

ジユールは左手首の部分に付いている、ダイヤルのような突起物^{ヒトリカブトモノ}を指さし尋ねた。

「そのダイヤルを回すことで、機能の出力を制御することができる。初めは3倍の設定になつてゐるが、あとはお前が耐えられる範囲で出力を上げてみろ。最大で8倍まで上げられるが、タフなお前でも5倍は無理だろ？」

一通りの説明をヘルムホルツから聞いたジユールは、施設の中を縦横無尽^{じゆうよむじん}に走つてみた。

左手首のダイヤルを制御し、3・5倍、4倍と出力を上げて行く。それをセンサー越しに観察していたヘルムホルツは、徐にマシンガンを取出しジユールに言った。

「避けてみる、ジユール！」

ジユールに向け、おびただしい数の銃弾が向けられた。

数発の銃弾が彼の体をかすめたが、どうにか全弾を避けることができた。

「これならどうだ！」「くそっ」

今度は小型のビーム砲を構え、ヘルムホルツは容赦なくジユールに向け、その引き金を引いた。

ジユールは信じられないスピードを發揮^{はつき}し、ビームをかわした。勢い余つたジユールの体は、施設の壁に激突した。

「さすがだな、ジユール！ 良くかわせたな！」

めずらしく声を高良げるヘルムホルツに、ジユールは怒鳴つた。

「馬鹿がお前！　まさか本当に俺を殺すつもりか？」

「スマンスマン。だが人間は危機的状況にならないと、しぃか真価を發揮しないからな。済まなかつたよ」

ジユールは全身の筋肉が千切れたかの様な激痛を感じ、少しの間動くことができなかつたが、身体能力加速機能の凄まじい性能と、その副作用ともいうべき肉体への反動を身をもつて学習した。ふと左手首を見ると、出力は6倍を示していた。

施設のセンサーより得られたデータを確認しながら、ヘルムホルツは静かな声で休息しているジユールに言った。

「ジユール。今この施設の中は完全に密室であり、盗聴される心配もないから聞くが、お前から渡されたグラム博士のノート、俺以外誰にも見せてないよな」

「当然だろ。博士との約束を、俺が破るとでも思つてるのか！」

「しばらくの間、あのノートに書かれた技術は公表しないつもりだ。あの小型化の原理は凄い。ただその手法に少々問題がある。もし王立協会の人間にこの技術が知れると、非常にまずいことになる……」「どういうことだ？」

馬鹿正直な性格なだけに、ヘルムホルツの表情が物語る深刻さがジユールに伝わって来た。

「あまり詳しいことを説明しても、お前じゃ理解できんだろう。ただ博士が行っていた研究は、現在のアダムズ王国の科学を真っ向から否定することにもなり兼ねない技術だ。それにこの技術は……」「ドンドン！」

ヘルムホルツの話を遮るように、施設のドアを叩く音たたがした。

「恐らくドルトン隊長が来たのだろう」

「やはり研究所で話すのはリスクが高いな。ジユール、お前近いうちに時間つくれるか？」

「構わないが、そんなに重要なことなのか……」

「神妙な面持ちで黙つてうなずきながら、ヘルムホルツは施設のド

アを開けに向かつた。

ドアを開けると、身の丈たけほどの長刀を背にしたドルトンが立っていた。

「どうだジユール。新しいスースの調子は」

「えつ。ああ、凄いスースですよ。だた使いこなすには少し時間がかかりそうです、体への負担も大きいし……」

ジユールはヘルムホルツの話の続きが気になつたが、とりあえずこの場を凌しのごうと、ドルトンに言つた。

「隊長の要件は済んだのですか。こちらも終わりましたので、そろそろ待機所に戻りましょうか」

まだ完全に痛みの引かない体で、急ぎ帰り支度じたくを整えながら、ジユールはヘルムホルツに言つた。

「なあヘルムホルツ、今晚飲みに行かないか。久しぶりに会つたんだし、たまには昔話でもしようぜ」

「そうだな。今日のデータも渡さなきゃならんし、仕事が終わつたら、トランザムの待機所に行くよ」

ジユールはヘルムホルツが作ったスースとベルトを持ち、ドルトンと共にカプリスの研究所を後にした。

ただジユールには、この国の科学を否定するほどという、グラム博士が行つていた研究がどういったものなのか、気になつて仕方がなかつた。

アダムズ軍は大きく二つに分けられる。

一つは街の治安や城の警護などを行う【警察部隊】であり、もう一つはジユールやテスラの所属する、他国との戦争やテロリストとの戦闘を受け持つ【軍事部隊】である。

警察部隊はその性質より、國の様々な場所に拠点を持ち、市民の平和な暮らしを維持するよう務めていた。

それに対し軍事部隊は、國の中心である首都ルヴェリエ、そして東西南北に位置するそれぞれの主要都市に、その拠点を構えるのみ

である。中でも軍事部隊の双璧そうへきをなすコルベットとトランザムは、王族の暮すアダムズ城内に、その拠点を構えていた。

城に戻ったジユールとドルトンが、トランザムの待機所手前にある、少し広めのホールに差し掛かると、何やら人集ひとだかりが出来ていた。

「どうしたんだ？」

ドルトンはその場に居合あわせさせたトランザムの隊士に尋ねた。
「どうもこうもないですよ、いつもの身内同士の喧嘩けんかです。勘弁かんべんしてほしいですよ、まつたく……」

人集りの中には、皇太子殿下じつたいじでんかである【トウェイン将軍】と、コルベットの隊長である【トウェイン將軍】の姿があった。

トーマスは現国王であるアルベルト王の一人息子であり、トウェインは国王の妻であり、トーマスが幼少の頃に病死した、母である王妃の実弟であった。

トウェインは王族でありながら、戦術に秀ひいでた才能を持ち、その能力の高さと実力で、軍のN.O.・2である將軍職に上り詰めていた。両者は叔父おじと甥おいの関係であつたが、幾度いくどと無く対立を繰り返していた。

「やあ、ジユール。久ぶりだね」

「お、おう。久しぶりだなテスラ。元気そうだな」

人集りの中にはもちろんコルベットの隊士もあり、そこにいたテスラはジユールの姿を見つけると、人込みをかき分けながら近寄り声を掛けてきた。

「テスラ、お前最初からここにいたのか？ 僕は今来たばかりなんだが、今回は何の騒ぎなんだ」

「【リーゼ姫】のことだよ。コルベットとトランザム、どっちが姫の警護けいごをするかで揉もめているみたいだよ」

リーゼ姫は、アダムズ王国の東に隣接りんせつする小国【パーシヴァル王国】の王族だ。

アダムズ王国とパーシヴァル王国は、古くから友好な関係を築い

ており、活発な交易を行っていた。

そんなパーシヴァル王国は5年ほど前、軍を統括する【ボーア將軍】による突然のクーデターによつて、王族は皆殺しにされた。

その後ボーア将軍は指揮下の軍勢と共に、王族で唯一生き残ったリーゼ姫を連れ、アダムズとパーシヴァルの国境の山岳地帯にある

【プトレマイオス遺跡】に立て籠もつた。

プトレマイオス遺跡は神話にて、女神ヒュパティアが建て、神器を祀つたとされる神殿であった。

しかし現在は廃墟と化し、神話にて語り継がれるような雅さは、微塵もなかつた。

そんな遺跡に立て籠もつたボーア将軍は、パーシヴァル王国の要請により、リーゼ姫の救出に来たアダムズ軍に対し、その攻撃に対する決死の抵抗を行つた。

しかし将軍はどうしてこのような一連の事態を引き起こしたのか、その行動理由を明確にすることは一切なく、また姫の身柄に 対しても何の要求も行わなかつた。

その為なぜ姫を連れ去り、こんな辺境の遺跡に立て籠もるのか、アダムズ軍には理由が分からなかつた。

そして理由の分からぬこの戦いを、いつしか人々は【ボーアの反乱】と呼んだ。

圧倒的な軍事力を誇るアダムズ軍の攻撃によつて、ボーア将軍の率いる反乱軍は、容易に壊滅すると誰もが予想した。しかし科学者としても名高いボーア将軍は、アダムズ軍の最新兵器をものともせず、自ら考案した特殊兵器を使用し、逆にアダムズ軍に甚大な損害を与えた。

独自の文化を構築していた小国のパーシヴァル王国は、アダムズ王国と親密な関係を築いてはいたものの、科学分野においても、アダムズに無い独特な技術を持つていた。

そんなパーシヴァル王国が持つ、独自の科学技術の発展をけん引していたのがボーア将軍であり、この反乱で将軍は、今まで自らが

培つてきた全ての知識と技術力を、敵対するアダムズ軍に叩きつけた。

見たこともない武器によるゲリラ的な攻撃に、アダムズ軍は苦渋^{くじゅう}を見た。しかも見られた。

当初の予想を裏切り、ボーアの反乱は開始から四年もの歳月^{さいがつ}を費^{つい}してやっていた。

そしてジユールやファラデーも軍の一員として、リーゼ姫^{だっかん}奪還^{だつがん}のためにこの場所で、凄まじい戦闘^{じさんとう}を繰り広げた。

いつ終わるとも分からぬ泥沼^{じづるぬま}の戦いになっていたボーアの反乱は、意外な形でその幕を閉じる。軍事力に大きな差^{さしだい}がありませんが、互角^{ふくかく}の戦闘を繰り広げていた反乱軍は、とある満月の夜にボーア将軍を含むほぼ全ての幹部兵士^{じがい}が、突然の自害^{じがい}を血行した。

翌朝、残りの反乱軍兵士はその全員が無条件で降伏^{こうふく}し、人質^{こしつ}だったリーゼ姫もまた、無事に保護された。

その後降伏した反乱軍兵士の一部は、アダムズ軍の拘置所に送られたが、残りの大部分はボーア将軍並びに幹部兵士に強要されたこととされ、咎め^{とが}を受けることなくパーシヴァルへ戻った。

ただし、再度同じ様な事態^{みがた}が起こらないよう暫定処置^{ざんていしょち}として、アダムズ王国がリーゼ姫の身柄^{みがら}を一時保護するとともに、パーシヴァル王国にアダムズ軍を駐留^{ちゆりゅう}させることとした。

ボーアの反乱が終結して一年が経過したが、その間アダムズとパーシヴァルに目立った出来事はなく、現在まで平穏^{へいおん}が保たれている。ただボーア将軍が何を目的として、この様な事態を引き起こしたのか、それだけは今も謎のままであった。

トーマス王子とトウェイン将軍の言い合いは平行線をたどり、一向に収集の日途^{じど}が立ちそつになかったが、そんな王族同士の喧嘩を放つておくわけにもいかず、周囲の者たちは半ば呆れて一人を見ていた。

特にトランザムの隊士たちには迷惑極まりなかつた。

荒くれ者の隊士たちではあつたが、トランザムを抱えているのは総司令のアイザックであり、王国最強の精銳部隊として、その任務には誇りとプライドがあつた。だがアイザックと親交を密にする王子は、幾度となくトランザムを私的な事情に使用し、さも自分の私設部隊のごとく、隊士たちを頼で使つていた。

トーマス王子は科学こそ苦手としていたが、非常に頭がよく、特に経済学においては非凡な才能を備えていた。

そのため近隣諸国との交易には積極的に取り組み、アダムズ王国の発展に大きく貢献していた。

ただあまりにも頭の切れが良すぎたため、自分以外の皆全てが愚か者に見え、その言動にはいつも人を見下す様な所があり、人望は極めて希薄であつた。

特に見た目が武骨なトランザムの隊士たちは、低能無知を決めつける発言を連呼し、そのくせ無理難題な任務を押し付けては、不適な笑みを浮かべていた。

そんな王子に対し、隊士たちの不満は極限までに達しており、『俺たちは王子の犬か!』と、耐え難い屈辱に怒りを露わにした。アイザックやドルトンは、そんな隊士たちを不憫に思いながらも必死になだめた。

「トーマス王子! いい加減にして下さい。他国の王族を警護するのには、コルベットの任務であると法で決まっているのです。これは国王がお決めになつたことで、いかに王子が反対されても、覆るものではありません!」

トウェイン将軍の発言にコルベットの隊士のみならず、トランザムの隊士までがうなづいていた。トランザムにしてみれば、余計な仕事を増やされたくなかったし、これ以上王子に振り回されるのは懲り懲りだつた。

だがそんなことにはお構いもせず、トーマス王子は言った。

「私とリーゼ姫はいざれ夫婦となる身です。未来の夫が警護して何の問題がありましょ？」

「それは王子が勝手に決めたこと。リーゼ姫が誰と結婚するかなど、そんなことは何ひとつ決まってはいない！」

怒りが頂点に達しそうなトウヒイン将軍とは逆に、なぜかトーマス王子はその顔色一つ変えず、むしろこのやり取りを楽しんでいるかの様であった。

その証拠に王子は軽い笑みさえ浮かべていた。

「ああ言つ王子の肝きもの据すわつてているところは嫌いじゃないんだが、そろそろ頃合あつあだな」

そう言つて、ドルトンは言い合いを続ける一人のもとに向かおうとした。すると、

「みな様、どうかなさいましたか？」

透き通る様な声が聞こえ、ホールに集まる人々はハッとなつた。

そこには紛れもない、話の当事者となつていて【リーゼ姫】の姿があつた。

小柄こがらであり、年齢の割に少し幼く見える顔立ちであつたが、その容姿はまるで女神が甦よみがえつたかの様に美しく、慎つつましくも艶あでやかであり、なにより微笑む彼女の笑顔は、見る者に何とも言えぬ安らぎを与えた。

リーゼ姫は王族でありながら、決して傲おごりが無く、身分に差別なく手を差し伸べることができる、真に清らかな性格の持ち主であり、育ちの良さを感じさせつゝも、性別や年齢、身分に関係なく誰からも好感を持たれていた。

なにしろボーアの反乱で肉親を殺され、四年もの間人質として監禁されていたにもかかわらず、その悲しみや苦労を一切表に出さなかつた。

「リーゼ姫！　侍女も連れずこのような場所へ、どうなさつたのですか？」

トーマス王子は素早く姫のもとに駆け寄り、膝ひざを下おづいた。

「申し訳ありません。はぐれた愛犬を探していたら、わたくし自身も迷子になってしまいました。アダムズ城はとても大きいので、途方に暮れていたのですが、何やら大勢の人の声が聞こえましたので、こちらに参りました」

「そうでしたか。ならばその愛犬、私が必ずや探し出し姫のもとにお届いたしましょう。愛犬というほどではありませんが、奇遇なことに私も犬を飼っていますので、その犬たちに探させましょう。私の【犬たち】は鼻が利きますので」

そう言つなり、トーマスはドルトンに田配せをした。

「やれやれ……」

ドルトンはため息をつき、それに気が付いたトランザムの隊士たちは、一斉にその場から逃げ去るうとした。

「やうだ！ 良いことを思いついたぞ」

突然声を張り上げたトーマスに、隊士たちの足は止まった。

「リーゼ姫。実は今トウェイン将軍と、あなたの警護について話し合っていたのですが、なかなか話がまとまらず、困っていたところなのです」

「まあ。わたくしの為に、そのような事をしていただきなくとも……」

「そろはいきません。あなたは我が王国にとつて、とても大切な方なのですから、お守りするのは当然です。

ただ、いつまでも話し合いで時間をかけるのはバカバカしいので、そこをうまく解決する方法として、おもしろいゲームを思いつきました」

「ゲーム？」

首をかしげ、困った表情を浮かべる姫をよそに、王子は得意げに言つた。

「はい、そのゲームに勝つたほうが、姫を警護するのです。いかがですか、將軍」

「いったいどんなゲームなのですか？ あまり気が進みませんが、

王子と言ひ争つていても終わりが見えませんので、その内容によつてはお引き受けしてもよろしいですが

さすがのトウェイン将軍も、姫の御前でこれ以上王子と揉めるのは得策でないと判断し、とりあえず王子の話を聞くことにした。「さすがは將軍。やはり軍人のトップたるものそぐでなくては。では説明いたしましょう！」

トーマス王子はホールの中央にある、鋼鉄製の巨大な球体のオブジエの前に足を運んだ。

「この鉄の球体。誰が何を意味して造ったのかは知らないが、温もり一つ感じさせない無機質なこの像に、私は昔から嫌悪感を感じていた。いつか処分するつもりでいたがその前に、この像の良い使い道を思いついた」

王子は鉄球をコンコンと軽く指で弾き、周囲の視線を独り占めしていることに酔いしれながら、話を続けた。

「聞いた話によると、この鉄球は2トンほどの重量があるものらしい。そこでコルベットの諸君、君たちの中でこの鉄の塊を、得意の剣術で破壊できる者が居たならば、私は黙つて姫の護衛役から身を引こう

突拍子の無い王子の提案に、それを聞いていた者たちは失笑で呆れかえる思いだつたが、黙つて話を聞いていたトウェイン将軍は、ついに怒りを爆発させ王子に詰め寄つた。

「そんなバカな話がありますか！ こんな鉄の塊、大砲でも壊れはしない！ こんな馬鹿げた話、ゲームどころかただの戯言に過ぎません。これ以上はさすがに付き合いきれませんぞ！」

それを聞いていたジユールも、不可能極まりない王子の提案したゲームに、度が過ぎると腹立しさを感じた。

「いくらなんでもフェアじゃなさ過ぎだ。冗談にもほどがある。なあテスラ、お前もそう思つだろ」「……」

テスラは無言だった。とこより、彼の意識は別のところに向い

ていた。

「なんて綺麗なんだろ？……」

「テスラ、お前なに言つてるんだ？」

「リーゼ姫だよ。あんなに美しい人を、僕は今まで見たことがない。まるで女神様のようだ」

完全にテスラは、姫に心を奪われているようだった。

「本当にきれいな人だな。それに顔色もすっかり良くなつて、元気そうでなによりだ。テスラは姫の奪還戦に参加しなかつたから知らないだろうが、反乱軍が降伏して姫を救出したとき、あの方は消衰しきついていた。げつそりと瘦せていたし、青白い顔をして放心状態だった。そう言えば、姫は俺たちと同じ歳らしいぜ」

あまり異性について人前で語らないテスラが、我を忘れて美しい姫を見つめるその姿に、ジユールは微笑しさを感じた。

姫について話す二人をよそに、相も変わらず人集りの中心で、王子と将軍の衝突は続いていた。

「王子、もうそろそろ宜しいですか。あなた様が何と言おうと、姫の警護は我々が行います。それ以上でも以下でもない。姫の御前でもありますから、もうこの辺で終わりにしましよう」

「いや将軍、私は至つてまじめですよ。アダムズ王国は、数々の不可能を可能にしてきた。その国を守る最高の集団であるあなた達なら、私は決して不可能では無いと思っている」

「無茶苦茶な屁理屈を言わないでください。不可能を可能にしてきたのは科学での話です！」

戦場では、どんな苦境に陥つても顔色を変えたことの無い将軍が、烈火の如く真つ赤な顔で言い返した。

そんな将軍を見て、トーマス王子は少しだけ何か考える素振りを見せた。

「確かに、この鉄球をただ破壊しろと言つるのは少々乱暴でありましたかな。では一つおまけを付けましょう

そう言つと、王子は自らの腰にさげていた雅やかな刀を手に取つた。

「この刀はラジアン博士が【神の力】を封じ込めて作つたと言われる十拳封神剣の一つ、名を【蛇之魔正】といいます。この刀は強力な電磁波を発することができ、その威力は百の大砲に匹敵するとのことだ。挑戦者には、この刀を貸して進ぜよう。いや鉄球を破壊できたならば、姫の警護役とともにこの刀も授けよう」

周囲に微かなどよめきが起きた。

【十拳封神剣】は天才ラジアン博士が、今までの生涯で最も尽力を注ぎ開発した十本の刀であり、国宝級の扱いを受けていた。刀であるにもかかわらず秘める威力は未知数であり、本当に神が封じられているのではと恐れられるほどであった。

その刀を授けるという言葉に、コルベットやトランザムの隊士たちは目の色を変えた。

腕に自信のある彼らだからこそ、王子の掲げた伝説ともいえるその刀が、喉から手が出るほど欲しかった。

だが目の前にある大きく丸い鉄塊を見ると、その現実に気が萎えた。さすがに誰もが不可能だと思つた。

あきらめの表情を見せる王国屈指の手練れ達に、王子はまたも不敵な笑みを見せ、嫌味の様に続けた。

「どうした、誰か挑戦する者はいないのか。それでもこの国最高の戦士なのか？」

不愉快なほど傲慢な王子に、ジユールは心底嫌気がさした。

そんな王子の悪態にまったく気を留めず、今だ一筋に姫を見つめるテスラを見て、ジユールは少しかう様に言った。

「なあテスラ、お前挑戦してみないか

「え、なに？」

「王子の提案したゲームだよ。王子の持つてる刀で、あの鉄球を破壊するのさ。そうすれば姫の護衛役と国宝の刀が手に入るそうだ。それに、姫の前で良い所を見せる絶好のチャンスだぞ」

「姫の護衛役！ そんな大切な事、なんで黙ってるんだよ」

そう言つなり、テスラは人込みを搔き分け、王子のもとに歩み寄つた。

「お、おいテスラ。本氣でやるのか」

「冗談半分で言つたつもりが、本氣になるテスラにジユールは驚き、少し戸惑つた。

王子の前に進み出たテスラは、トーマス王子に改めて確認した。

「王子。その刀でこの鉄球を破壊したら、本当にリーゼ姫の護衛役まかせを任せてくれるのですね」

「ほう、アイザック総司令のじゆく子息しゆくが出になられるか。この国一番の剣の使い手として名高い、そなたが挑戦するからには私もそれに応えねばなるまい」

少し下手したてに言いながらも、不敵な表情はそのままに、王子はテスラに蛇之龐正おろちのあらまさを手渡した。

国王を親に持つトーマス王子と、軍の総司令を親に持つテスラは、幼少の頃からの顔見知りであった。

幼き頃よりトーマスは、皆を不快にさせる天賦てんぶの才を備えており、五つ年下いとこだったテスラは、からかう相手として恰好かっこいいの餌食えじきであり、幾度いくどとなく嫌がらせを受けた。

しかし、なぜかテスラはそんな王子の態度に何の感情も抱かず、また何をしても反応の無いテスラに対し、いつしか王子は距離を置くようになつていた。

ひょんな場所で再会した一人だが、相変わらずテスラは王子に対し何の感情も抱かなかつた。

テスラの頭は美しいリーゼ姫の事でいっぱいであり、ただでさえ興味のない王子のことなど、どうでも良かつた。

そんなテスラであつたが、手渡された蛇之龐正を鞘から引き抜くと不思議な感覚を感じた。

軽く素振りをしてみると、蛇之龐正は耳には見えない微小な振動を発生させ、その感触はテスラの体に伝わった。

「……」

テスラは蛇之麿正を手に少し考えている様子だったが、ゆっくりと歩きだし姫の前で止まった。

「リーゼ姫。ここに居られては少々危険です。もう少し下がりください」

姫が安全な場所に移動したのを確認すると、テスラは鉄球の前に立ち、中段よりやや下目に抜身の刀を構えた。

張り詰めるような空氣に、周囲は緊張で包まれ静まった。

テスラが醸し出す異様な雰囲気に気押され、王子までもが息を飲んだ。

ジユールは、目を閉じて集中力を高めるテスラを見つめ、その瞬間を待った。

静かに蛇之麿正は高周波振動を発し始めた。

そしてテスラの集中力が高まるのに比例するかのように、高周波は増大していき、その振動はいつしか激しい電磁波を発した。

「バリバリバリッ！」

目の眩むほど光輝く刀身から、凄まじい放電と風圧が発せられ、周囲の者達は立っているのさえ困難であった。

「凄いな。まるで目の前に【嵐】が集約し、留まっている様だ」近くにいるドルトンの声が聞こえたが、ジユールはテスラから目を離さなかつた。

風圧はさらに強まり、窓ガラスのいくつかにひびが入った。

次の瞬間、

「くる」

ジユールがそう感じたと同時に、テスラは目を見開き、蛇之麿正を鉄球めがけて振りぬいた。

「ズガガガーン！」

目の前に雷が落ちたような、凄まじい轟音と衝撃が起きた。

ホールの中は爆撃を受けたかの様に何もかもが散乱し、テスラが刀を振り抜いた方向にある壁には、巨大な穴が口を開けていた。

あまりの衝撃で目の前で何が起きたのか把握するのに少し時間がかかったが、ホールにいる者すべてが目にしたのは、紛れもなく粉々に破壊された鉄球の残骸ざんがいであった。

ただ呆然と立ち尽くす王子。

まさに神の発した一撃の様であった。

いかに凄まじい能力を秘めたとはいえ、たかが一本の刀にこれほど威力があるなど、だれも想像できないことであり、また初めて手にした刀の能力を、ここまで引き出したテスラの剣士としての腕前に、ジユールは舌を巻く思いだった。

「ま、まさかあの鉄球を……本当に、破壊するとは……」

王子は心が抜け落ちたかのように、力なく言つた。

「刀を鉄球に叩きつける瞬間に、電磁波で空気中の水分を加熱し、瞬間的に熱膨張させて鉄球に高負荷をかける。そこに高周波振動を叩きつければ、あとは勝手に鉄球が粉々になるだけです。もし届くのであれば夜空の星でもこの鉄球の様に真つ二つにできるでしょう」テスラは自らが実践じっせんした方法を淡々と語つた。

そしてここにいる最高・最強と呼ばれる隊士たちは、それがどれほどの能力であり、決して己おのれでは真似まねできない神の領域と言つてもいい技術を目の当たりにし、脱帽だっぽうする思いだった。

「トーマス王子、約束通り鉄球を破壊しました。これで姫の護衛役は、我々コルベットにお任せ下さいますね」

テスラはそう王子に告げると、少し離れた壁に半身を隠し、恐る恐る様子を伺うがつり、姫に目を向けた。

「ハハハハッ。眞に素晴らしい見事な剣技であつたぞテスラ。だが最初に言つたように、これはゲームだ。ただの余興よぎょうであつて、本当に姫の警護を譲るわけなかりつ

「何ですと！」

この期こに及び言い訳あわせいくがましく戯言ぎげんを言つ王子を、テスラは鋭く睨のみ付けた。

その目には明らかに殺氣が込められており、それに連動する様に

蛇之庵正は高周波を発した。

「やめろテスラ！」

叫んだジユールは咄嗟^{とっさ}に自分の持つ刀に手を掛け、殺氣に怯む王子の盾となる様に立ちはだかつた。

「何を考えているんだテスラ、冷静^{なまじ}になるんだ」

視線を交わしながらも、黙り対峙する一人。

テスラの目は明らかに殺意に満ち溢れており、その殺氣は王子のみならず、なぜかジユールにさえも向けられていた。

ジユールはその殺氣を真正面から受け止め、テスラが思い留まる様、必死に願い信じた。

「そこまでだ、二人とも」

ドルトンは威圧感のある低く重い声で、睨み合^{うな}う一人に制止を促がした。

そして別人の様に縮み上がっている王子のもとに歩み寄り、赤子を諭す^{さし}ように言った。

「見苦しいですぞ王子、約束通りここは姫の警護を彼らに任せます。そしてあの刀もテスラに渡しなさい。彼は正々堂々と、王子のほうから持ちかけた【ゲーム】に臨み、見事それを成し遂げたのです。ここはご自分の言った事に責任を持ちましょう。負けを素直に認め、その相手を心から称賛^{しようさん}することが出来る様になれば、今後国を背負うあなた様にとって大きな財産となることでしょう。またそうすることで、あなたの器^{うつわ}の大きさを、壁の陰から見守る姫に見知らせる事にも繋^{つな}がるはずです」

王子は神妙な面持ちで少し考えた末、潔く諦めの言葉を発した。

「最高の科学と最高の剣術の成せる技か。まあ良い、今回は完全に私の負けだ。姫の警護役からは身を引き、その刀もテスラ、約束通りお前に譲^{ゆず}ろう。所詮私がそのような刀をぶら下げていても、無用の長物だしな」

テスラは刀をひき、鞘^{さや}に納めた。

ほつと胸を撫で下ろし、ジユールは一息ついた。

それでもテスラが、王子はおろか自分に對してまで本物の殺氣を向けたことに、彼は困惑した。

「申し上げます！」

一人の一般隊士が、血相けっそうをかえてホールに駆け込んできた。

「ヤツです、ヤツが現れました！ それも二体同時です！ 二体のヤツは王立協会本部の【エクレイデス研究所】を強襲きょうしゅうし、【何か】を強奪じょうだつした模様。その後二手に分かれ、一体はルーゼニア教総本山【金鳳花五重塔】に、もう一体はルヴェリエ中央大路の【羅城門】に現在立て籠もっている様子。また未確認情報ですが、現在も王立協会本部のエクレイデス研究所において、銀色の体をした巨大な翼を持つ【化け物】がいるとの報告も受けています。コルベット・トルンザム両部隊におきましては、至急出動お願しきゅういいたします」

急転する事態に隊士たちの顔つきは、一瞬にして戦場のそれに変わった。

「まさか二体のヤツは、何らかの目的を持ち、共同で行動をしているというのか？」

今までにない状況に、ドルトンは不安と疑問を感じた。

「その様な詮索せんさくは後にしろドルトン。急ぎスクランブルだ。我々はエクレイデス研究所に向かう。お前たちトランザムは、二体のヤツのもとに向かい対処にあたれ！」

有無を言わさぬ勢いでトウェイン将軍はドルトンに指示し、また自らが指揮するコルベットに対しても急ぎ戦闘準備を整え、現場に向かうよう指示した。

ジユールは銀色の化け物について、ヘルツが話したラヴォアジエと呼ばれるヤツの事ではないかと思つた。

不確定な情報でありながら、トウェインがコルベットをエクレイデス研究所に向かわせようとしていることが、ジユールの考えをさらに確信めたものに近づけた。 その時、

「銀色の体をした巨大な翼をもつものとは【大きな鷲】の姿をなさつていませんでしたか」

報告に来た一般隊士に、血相を変えたリーゼ姫が詰め寄り問い合わせた。

「申し訳ありませんが、その様な連絡は受けていません。何しろ研究所は現在その一部が炎上しているらしく、事態が把握しきれない状況にあります。何処からなぜ炎が発生したのかも不明ですし」

「そうでござりますか……」

リーゼ姫は落胆らくたんの色を見せた。

「ただ、エクレイデス研究所には、何重もの自己防衛機能が備わっています。逃走した二体のヤツもそれら強力な防衛機能による攻撃を受け、ある程度のダメージを受けているものと思われます。未確認の化け物も今だ研究所に留まっているというのであれば、それ相応の攻撃を受けているはずであり、深手を負いその場から離れられないでいる可能性も考えられます。いや場合によれば、すでに死亡しているかもしれません」

「死つ！ そ、そんな……」

一般隊士の報告に青ざめた姫は、崩れ落ちる様に氣を失った。

それに気づいたテスラは、倒れ込む寸前の姫の体を抱き抱えた。

そして彼は騒ぎに駆け付けた数名の侍女たちに姫の体を丁寧ていねいに預けた。

「テスラ、お前も早く皆と共にエクレイデス研究所に向かえ！ 私もすぐに行く！」

テスラは將軍の指示が耳に入りながらも、少しの間名残り惜しそうに姫を見つめた。

細くて小さな姫の体を抱きしめた感触が、テスラにはこの世のものとは思えぬほど心地よく感じた。

「全員急ぎL級戦闘配備だ！ 目標は逃走した二体のヤツ！」

ドルトンはランザムに対し指令を出した。

「リュザック。お前はランザムの指揮をとり、南方の羅城門らじょうもんに向

かえ。俺はジユールと二人で東方の金鳳花五重塔に向かう

「面倒だけどやるしかないか。けんど隊長、戦力のバランスが釣り合ってないけどいいんですかい」

ドルトンの指示に対し、リュザックは尋ねた。

酒好きの彼は一見不真面目に見えるが、その実力はドルトンに次ぐものであり、状況判断能力に長けた強者であった。

「五重塔のほうが距離がある上に、この時間だと向かう道が込み合っているはずだ。少数で行動したほうが機動性が良い。ジユールをサポート役にし、俺がヤツを叩く。なにか不満があるか

「いや、何もありませんで。了解しやした」

準備を整え終えた隊士たちは軍の特殊車両に乗り込み、目的地に向け次々に出発した。

まだ夕刻であつたが、弱い雨の降る生憎の空模様のため、すでに辺りは暗くなっていた。

ヘルムホルツより渡された最新のスーツと各装備を施したジユールは、ドルトンと共にそれぞれが軍のバイクに跨り、雨の中を五重塔めがけてアクセルを開けた。

ドルトンの予想通り、五重塔に通ずる道はかなり渋滞していたが、二人の操るバイクはその僅かな隙間を、全速力で駆け抜けた。

ルーゼニア教の總本山である金鳳花五重塔に着くと、すでに一般の二小隊が到着していた。

だがそれらの隊士達は、五重塔に入り込むヤツとの戦闘により複数の負傷者を出しており、無事な者も一般市民の護衛と非難補助で手一杯な状況だった。

それでも市民の非難はひとまず無事に完了したらしく、五重塔に人影は見られなかつた。

薄暗い雨の中、ジユールは目前にそびえ立つ五重塔を見上げた。

ルーゼニア教の總本山として、いつもはその信者で賑わっているはずのこの場所は、今は不気味に静まり返り、ただ雨の打ち付ける

音だけが聞こえていた。

ジュールはなぜか、これから始まるつとじている戦いが、自分の運命に大きく係つていそうな気がした。

それはどう足搔あがいても逃れることのできない過酷な宿命であり、踏み出せばもう後戻りできないと直感した。

言葉で表すことのできない不安に駆かられ、ジュールの足はその一步を踏み出すことに躊躇ちうちょした。

「覚悟はできたか、ジュール！」

一般隊士より現状の報告を受けたドルトンは、そう言つてジュールの背中を強く叩き、長刀を背負つた。

その刀が間違いなく十拳封神剣の一つであることを、ジュールは容易に想像できた。

そして背中から伝わってきたドルトンの力強さは、躊躇するその一步を踏み出すのに、十分なほどの勇気を彼に取り戻させた。

「行くぞ！」

二人はヤツの立て籠こもる、金鳳花五重塔きんぽうげ いのしょ ごじゆとうに突入した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317w/>

月読の奏

2011年10月10日03時21分発行